
ハネグンのほらふき娘

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハネグンのほらふき娘

【Nコード】

N0949Y

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

物語好き高校生「そよ」の物語。

「夢のお告げ通りだ」

いつものように近所の子をひきつれ歩くそよに声をかけてきたのは、同級生の男子だった。

登場人物紹介

「ハネグンのほらふき娘」の人物紹介です
(全員揃うのは12話)

・三矢 そよ (みつや そよ)

主人公

物語好き

高校 二年生

物書きの悲しい性により、とあることに巻き込まれる

・国府田 双葉
こうだ ふたば

ふたまた ふたは
二股双葉と、呼ばれる容姿の優れた男子
高校二年

・岡村 以知子
おかむら いちこ

放送部 美声の持ち主
高校二年生

・四条 克
しじょう かつ

ごつい体形のスイーツ男子
高校二年生

・伍代 夢
いだい ゆめ

高校二年生

・山中先生

文芸部顧問 30代男性

・生島 いくしま 展子 のりこ

別の高校に通う創作仲間 高二

・ミチカ

そよの従姉妹

小学一年生

序章

いとこの中で一番の年長者である私は、ことあるごとに、年下のいとこたちの面倒を見るように頼まれた。

「そよちゃん、遊んで」

幼なじみ同士で結婚し地元に残った両親は、それぞれの親（つまり私の祖父母同士）や兄弟姉妹との仲もよく、何かあるとすぐ集まり、それはとてもにぎやかなものになった。

そんな中、わらわらと群がってくるいとこたちの相手をするのは、当然のように年長者の私で、その一番手っとり早い方法が、絵本を読んで聞かせることだった。

昔から本を読むのが好きだった私は、そこらへんの、お子さまが好きな物語のツボってやつを、自らの経験で知っていたからチョイスには自信があったし、幸い物語好きDNAは他のいとこたちにも流れていたようで（あ、流れるのはDNAじゃなくて、血か？ まあ、いっか）、それがうまい具合にマッチしたってこと。

大人たちが酒盛りをはじめた隣の部屋で、私は延々とそれこそを声が枯れるまで絵本を読んでいた。

絵本がなくなると、短めの童話を読んだりもした。

まあ、本当はそこまでやらなくてもいいのかもしれないけど、物語の続きをきらきらとした瞳で待ついとこの顔を見ると、ついつい読んであげたくなっちゃうっていうのは、その気持ち——物語の続きをわくわくと待つ気持ち、すっごくわかったから。

転機になったのは、親戚みんなで旅行に行ったときのこと。

またまたの大集団で、注目を集めながらの旅行だったんだけど、その移動の電車の中で、とんでもないハプニングが起きた。

私が、絵本を持ってくるのを忘れてしまったのだ。

けど、そんなことを知るはずもなくお構いなしのいとこたちは、いつものように私に物語をねだり始めた。

予めわかっている集まりや旅行の際には、新しい絵本を必ず一冊は仕入れる（勿論、親からのお金で）ことにしているのも知っているいとこたちは、今日の物語はなんだろう、なんてうきうきでした。

絵本はない、なんて言ったもんなら暴徒化しかねない、いとこたちの姿を想像し戦いた私は、玄関の靴箱の上に置き忘れた絵本の内容を思い出し、なんとか話しはじめた。

話しながら、最初こそ忠実にその内容を辿ろうとしていた自分が、徐々にその内容を見逃し、自分が楽しいと思うように話を変えながら話してしまうこと、そしてそれを楽しんでいることに気がついた。

結果、当然のことながら、終わるころには全く違う内容の物語になった。

いとこたちには、ウケた。

最初こそ、絵本がないことに戸惑っていたようだが、物語好きD

NAのなせる業か、はたまた運の良さか、いたくお気に召していた
だけようだった。

更に、思いがけないことに、本を見ずに物語を語る私に、いとこ
たちはくすぐったいほどの、尊敬のまなざしを向けてきた。

そして、「もっとそよちゃんのお話が聞きたい」なんて可愛いこ
とまで言ってきた。

その言葉に気を良くし調子に乗った私は、今まで読んだ多くの物
語に、私なりのアレンジを加えて次々と語って聞かせたのだった。

—— 思えばそれが、全てのことはじまりだったのだ。

「いやあ、本当に残念だけど」

文芸部顧問の山中先生は、前置きも少なく部が正式に廃部になったことを伝えてきた。

放課後の職員室は先生たちの姿もまばらで、開け放った窓からは運動部のかけ声やホイッスルが聞こえていた。

廊下からは、吹奏楽部の音合わせが聞こえてきた。

ブーとかボーとか。高くなったり低くなったり。

私にとって少し間抜けなブーボーにだって、聞く子が聞けばそれぞれに音があるんだろうなあと思った。

私に、聞く耳がないだけ。

ああ！ みんな部活をしてるんだ！

自分の好きなことをしているんだ！

そう思った途端、足の裏が熱くなってむずむずとしてきた。

こうして一人職員室に突っ立って、私はなんでこんな話を聞かなきゃならないんだと、恨めしい気持ちにもなってきた。

不公平だ。

不条理だ。

そもそも、去年、私が高校に入学したときから、文芸部は虫の息だった。

新入生は私一人で二年生はゼロ、三年生が四人（そのうち幽霊部員が二人！）といった具合でようやく部として成立している状態だ

ったのだ。

だから、こうして先生から廃部を告げられることは予想できるところであったし、客観的に見ても妥当だと思えた……。

しかし！

しかしですよ！

自分の代で部が潰れるなんて、胸くそが悪いったらありやしない。潰すなら、去年の時点でそうして下さいっていうの。

まだ、先輩たちがいる時点で。だったらその傷を、みんなで舐めあえたものの、今潰されたら私しかないじゃないかよ、おいつ、てな感じよ。

ああ、でも。

この顧問がいるといえはいるか。

「本当に残念だけど」なんて言いながら、ちっとも残念な顔をしていないこの顧問がっ。

がーっ！

つまり、私の紹介の仕方じゃダメだったってことか。

今年の新入生はゼロだったってことよね。廃部になったってことは。

つまり、そういうこと。

くー！ 脱力。

この間やった新入生向けの部活紹介、部員が私一人だけになった文芸部では、当然私がそれをした。っていうか、するしかなかった。はつきり言って、一人で部を背負うなんて重荷だし、それに一人で部の紹介をしたとこなんてうち以外はなかったし、それって恥ず

かしいし、もうこんな部なんて潰れちまえって思ったことは確か。

……まあ、確かに。

そうは思ってたけれど、悲しいかな、ほんの少しは期待してしまいましたよ。

もしかしたら、物語好きの新生者が何人か入ってくれて、でもって「先輩」なんて呼ばれたりして、なんて。

そんな夢を見なかったといえば、嘘になる。

「三矢、おい。聞ってるか」

おおっと正気に戻る。聞いてはいましたが、ちとちがう世界に行っていましたよ。

「まあ、本当に残念だけど」

さっきも聞いたような台詞を言ってくる山中先生は、どう鼻屑目に見てもやっぱり残念そうじゃなかった。

残念っていうよりも、どこかすっきりとした、もっと言わせてもらえば晴れやかな顔にさえ見えた。

まあね。

廃部寸前の部の顧問でいることは、生徒である私には想像もつかない面倒さがあったんだろうなとは思うけど。

でもよ、表面上だけでもいいから、せめて今だけは残念そうな顔を見せて欲しかったって思うのは私のわがままでしょうか。

先生は、私がちゃんと聞いているかを確認した後、「部室にある私物は持ち帰るように」とか、「それ以外は特にすることはないから」とか、そういった後始末的なことを話し出した。

ああ、そういえば部室があるのをいいことに、私物をあれこれと置いていたなあと思い出し、それを全部持ち帰らなくちゃいけないってことを考だすと、軽くめまいがしてきた。

部室に置いてあるのは、ほとんどが本だった。

本は重い。

……重い。

何か打つ手はないものかと考えつつも山中先生の言葉に頷くと、自然と先生の足もとに目がいった。

顧問の、いや、もと顧問の山中先生は30代半ばの国語の先生だ。授業になると大声でテキストを読みながら、ずったずったと教室を歩き回るのが特徴といえど特徴の先生である。

元気はいい。

見た目もそう悪くはない（しかし、いいというわけでは全くない）。

そう考えると、足元にももう少し若さというか覇気があっていい気がした。

日曜大工センターの入り口に、セールの赤文字に飾られどっさり積まれているような茶色のビニサンは、どう考えてもいただけない。しかもこのサンダル、右側の甲のところが既に破れかかっている。余計にくたびれた感じを醸し出していた。

さらにそのサンダルに包まれた靴下も微妙なものだった。

普通の黒の靴下なんだろうと推察するけど、ところどころ肌の色が透けるくらい繊維が薄くなっている箇所があるのだ。

まさか初めからこういったデザインとは思えない。

古いものを最後まで大切に使用しているというよりは、無頓着でそのまま履いているって感じだ。

先生は、独身だったはず。

お嫁さんがいてこれなら、また面白いって言えば面白いけど。

ふと、顧問が山中先生じゃなかったら、クラブは潰れなかったんじゃないかって思った。

……いや、それは被害妄想か。

潰れたのは部員が集まらなかったからなんだし。そして集められなかったのは私だ。

「なあ、三矢。おまえ、このままどこのクラブにも入らないつもりか」

つもりもなにも入りたいクラブはもうないんですけどっ、なんて突っ込みを心の中に入れる。

「そんなの。……わかりません」

うちの学校は部活は必須じゃないから、このまま帰宅部になろうかなって実は思っていた。

「三矢の気持ちはわかるけど、あれだぞ、高校時代に何かに打ち込むのは、いいことだぞ」

どっかの本に書いてあるような、なんかのドラマで熱血教師が言いそうな、あったーりまえのことを言っていると、先生は満足そうに頷いた。

「きっとおまえの才能が生かせるところがあるはずだから」

はあ？

才能？

あるか私にそんなもん。

だったら教えてくれよってな言葉をぐっと飲み込むと、私はわざとらしい笑みをはりつけた顔を先生に向けた。

『イマドキ、みんなで何かをするなんて、だるくない？ かえって良かったと私は思うよ』

部活が潰れたことを、違う高校に通う中学時代の文芸部仲間にもールをしたらそう返事がきた。

彼女は生島展子といって、高校に入ってから帰宅部となり、小説はケイタイで書いていた。ケイタイでのサイトも持っていて、そこそこ人気もあるようだ。

ちなみに生島が書くのは、ホラーだ。

犬が苦手で、小さな犬がいても怖がって私の後ろに隠れるくせに、スプラッターは大丈夫だなんて人間って不思議だ。

私がそう言うと「すごい冷めたところなのに、そよが童話を書くほうが不思議だっていうの」と返される。

私が冷めているかどうかは置いておき、童話を書いているのは本当だ。

いとこたちとの体験から、私はすっかり物語作り、それも子ども向けの物語にはまってしまったのだ。

そしてそれこそが、廃部寸前の文芸部をもり立てられなかった理由でもあった。

私の書く童話には、オリジナリティがない。

私が書く童話は、既存の物語のパロディなのだ。

題名を言えばピンとくると思うけど、たとえば「マッチ売りの三

匹の子豚」とか、「一寸法師頭巾ちゃん」だったり。

ちなみに、「マツチ売りの三匹の子ぶた」はラストがあまりにも強烈で、いとこたちから号泣者が続出したため母からは、「子ぶた物語禁止令」などというものが出された。

お母さんだって、豚肉好きなくせにさあ、なんて拗ねながらそのことを生島に報告すると、あんたの童話にはホラーの魂があるね、と褒められた。

ホラーの魂ってどんなのだよ。

それに、そもそも童話だって、そうかわいだけの物語じゃないんだけど。

とはいえ、嫌がる人に無理にそれを語り通すほどには、私もそこに拘りはなかったし。

まあ、そういったこともたまにはあるものの、古今東西の昔話や伝説といった民話や古典ともいえる創作童話の数々を読むうちに、これとあれがくっついたら面白そうとか、これはこんな展開になったほうが面白いんじゃないかって、私の興味の対象はもっぱらそっち方面だった。

生島や文芸部の先輩たちみたいに、何が何でも正真正銘のオリジナル小説を書くんだ、といったことにあまりこだわりはなかった。

そして、そんなオリジナルを追求する人の中にと、同じ「創作」といった括りの中いても私は完全にイロモノだった。

とはいえ、いろんなものを書く人がいるのはいいことだと先輩たちは優しくかったし、私が書くものを喜んで読んでくれた。

しかし、先輩は卒業され、残ったのはイロモノの私だけになった。

イロモノは、正統派があつてこそ光るのものであつて、単体となると消えそうな電球の光みたいな存在だった。

当然そこに魅力を感じてもらえるほどの威力はなく、同学年の部員も私一人から増えることもなければ、新入生も入らなかった。

『かえって良かったと私は思うよ』なんて、多分生島は慰めの意味で言ってくれたんだと思うけど、いろんな意味でまだそれを受けとれるほどには、私の気持ちは上がっていなかった。

「そよちゃん。そおよちゃん。起きてよお」

日曜の朝っぱらから、私のベットのそばに立つのは、白雪姫の王子様でもなければ、シンデレラの魔法使いでもない。

「……う。おはよ、ミチカ。あ、ほらミチカ。ハナ出てる。ふいて、ふいて」

よろよろと体を起こしながら、そばにあったティッシュペーパーを一枚取り今年小学一年生になったいとこのミチカの鼻に当てる。

ミチカが顔をしかめながらフンとハナをかむと、手にあったティッシュがとたんに湿り気を帯びた。

部屋の隅にあるゴミ箱にそれをぽんと投げ捨てると、重い体をよいしょと起こした。

完全に寝不足。ああ、体が重い。頭も重い。

「そよちゃん、ほら。お話会だよ、お話会」

ミチカは、体は起こしたもののベットのの上に座ったままの私を、うんしょんしょと引っ張りながらそう言った。小学生とはいえ、本気の力を出されるとさすがにやばい。

「起きるから、わかったから、引っ張らないの」

その言葉に安心したのか、ミチカは私の手を離すとベットにちょこんと座った。

ミチカは近所に住む母の妹の娘だ。彼女はいとこの中で最も私の物語に執着を示す子でもあった。

母はミチカのことを、「そよのファン一号さん」と言う。

……まあ、悪い気はしないけどさ。

「ふふ。そちゃん、今日から新しいお話でしょ。楽しみだね。みんなもそう言ってた」

ミチカの言葉にハハと笑いながらうーんと伸びした。

そして、着ていたスウェットを脱ぐと、床に落ちていたシャツとジーンを身につけた。

新しい物語。

だから寝不足なんですよ。頭も体も重いんですよ。なんてことは、ミチカには言わないけどね。

「あれ、ミチカ、朝ご飯は食べてきたの？」

そういえば今は何時なんだろうと部屋の時計に目をやると、八時を過ぎたところだった。

間に合ったっていうか、ちょうどいい時間だ。

「うん、食べたよ。ミチカね、そちゃんの分のおにぎりも持ってきたもん」

そう言うとミチカは、小さなバスケットを私の目の前にぐいっと差し出してきた。

「おお！ 愛い奴じゃのう」

よしよしとミチカの頭をぐりぐり撫でると、ミチカは子ネコみたいに笑った。

さてさて、急がねば。ミチカ以外にも、私の物語を待っていてくれる子たちがいるのだ。

「じゃ、行きますかいな」

ミチカの手をとり歩き出すと、弾むような足取りでミチカはついてきた。

「あ、そうだ。ごめん、歯だけ磨かせて」
寝起きの口の中ってすごく汚いんだってよ、と私がそう言う
ミチカは腰に手をあて顔をしかめ「もう。早くしてよ」と偉そうに
言った。

ミチカと、まだ半分寝ぼけ眼の私とが外を歩き出すと、どこから
見ていたんだろうかと思うほどの子どもたちが表に出てきた。
子どもたちは帽子を被り、首からは水筒をぶら下げたり小さなり
ユックを背負っていた。

うむむ。今日も今日とて気合が入っておりますなあ。

玄関先まで出て見送るママさんたちに、「そよちゃん、今朝もよ
ろしくね」なんて声をかけられる。
よろしくされるほどの事でもないんだけど、と思いつつ「はい」
なんて調子よく手を振ってみたり。

気がつけば、いつものように私とミチカを先頭にわらわらと子ど
もたちが後ろについて歩いていていた。
私はともかく、あまり列の先頭と縁のないミチカは、ここぞとば
かりに毎回得意げな顔をするのだ。

私達の行き先は、すぐそこにある公園だ。
その公園には、いい具合に円形のベンチがあり、物語を語るに
はぴったりのシチュエーションだったのだ。

「へえ、夢のお告げ通りだ」

調子よく元気に歩いていた私の耳に、いきなりそんな声が聞こえてきた。

見ると、えらくオトコマエの男子が公園の入り口にある柵に、腰をかけていた。

絶対に知っている顔だ。

だけど、名前が思い出せない。

「うー、かゆかゆするわ」

自分の記憶力の悪さにいらつき、左手で胸のあたりを摩りだすと（っていうよりは、搔きだすと）、ミチカから怪訝そうな視線を向けられた。

ハハハなんて笑って、その手をさりげなく頭に移動させながら、こいつの名前をミチカに訊いたところでわかるはずもないしなあって埒もないことを考えていた。

オトコマエはというと、柵に座ったままニマニマとした顔でこっちを見ている。

腹に虫でもいるのか？

変な男だ。

そんな私達の様子になにかしら感じたであろうミチカが「あの人、そよちゃんの友だち？」と訊いてきた。

すると、それに重ねるように後ろにいた子の一人から「わかった！ そよの彼だろ！」なんて、生意気な声が飛んできた。

「彼？ んなわけないっていうのっ！」と、まさに今、私が言おうとした台詞が別の子から飛び出した。そして本人である私そっちのけで、あーでもないこーでもない、子どもたちは好き勝手なことを話しだした。

ここにいる子たちは、幼稚園児から小学校低学年の皆さんだ。大

人が「幼い」とか「かわいい」なんて思っている年頃の子たち。けれど、この子たちが大人が思う以上にませていて、ラブな話が大好物だっているのは意外と知られていないことかもしれない。

下手すると園児でありながら私よりも経験豊富な子もいるくらいだから、恐れ入る。そんな子たちにとって、このオトコマエは格好のエサだった。あ、オトコマエだけじゃないか、私もセツトだ。

ほんとに、ラブな話が好きだよねえと半ばあきれながら、いつもよりも賑やかになった子たちを連れ、オトコマエの側を通る。

通りたくないけど、公園に入るには通らなくちゃいけないし。すれ違いざま「ハネグンだよね」と私が訊くと、「酷いなあ、三矢さん。ぼく、隣のクラスだよ」なんて答えが返ってきた。

やっぱり！

見たことがある顔だってことは、正解。

あとは名前かあ。

ちなみにハネグンとは、私たちが通う高校の通称だ。

波根野群青高校。

このやたらと長ったらしい名前が、うちの校名だ。

波根野はこの地名だからともかく、なぜ群青なのかは謎だ。

一説によると、青春の青さを表しているとの話だが、青春云々はともかく生徒には、ほとほと迷惑な校名だ。

長いし、面倒な字が多い。

校名を書く時、一々面倒なのだ。波根野だって面倒なのに、それに加え群青。

世の中には、群青なんて文字を一生書かない人だっていると思う。生活面においても、必要のない文字だし。

校名を付ける人には、そこんとこ考えて欲しかったものだと思う。

でもそんな校名とわかっていて受験したのは誰かと聞かれるとアレレになるので、露骨には言わないけど。でも、心の中ではぶすぶすとかすぶっている思いではある。

校名を長いと思うのは、私だけではないのだろう。

だから、みなハネグンと呼ぶ。

生徒だけでなく、親も先生も。

ハネグン。

この、なんの名前だかわからないそのわからなさを、私は結構気に入っていた。

そしてハネグンのオトコマエはというと、柵から離れ、なんと私達と一緒に公園に入ってきた。

ちらりとみると、やけに涼しい顔をしている。

全くもって変な男だ。

当然のような顔をしてついでくるこの男が気にならないといった嘘になるけど、優先順位を考えるとそれは低い。

ラブな話で盛り上がっていた子どもたちも、公園に入ると頭の中がお話モードになったようで、ベンチのどこに座るかでもめ出した。

そんな命がけの顔をして席決めをしなくっても、席なんてどこに座っても同じなのになえと思ってしまうあたり、自分の老いを感じる。

老いと言ってしまうのはアレかな、乱暴かな。

つまりこんなところが、生島に「冷めている」と言われる所以なのだろうなあ。

でもさ、好きな子の隣に座ったところで、その子が自分を好きになってくれるわけじゃないのになえとは思うよ。

「よう！ 作家先生」

おはよう、朝から大変だねえ、と労いの言葉をかけてくれるのは、側のベンチで将棋をさすおじいさんたちだ。

おじいさんたちは、将棋だけでなく、さりげなく子どもたちの様子も見ってくれるので助かる。

おはようございますとぺこりと頭を下げると、おうと手を上げて応えてくれた。そういった関係って、心地いい。

子どもたちが揉めるままにしばらく待っていると、段々とその様子が変わってきた。

落ち着いてきたのだ。

どうやら今日の席は、決まったらしい。

お話を始めた最初のころは、それこそベンチに座らせることか
らして一苦勞だった。誰の隣がいいとか、この場所がいいとか
んとか。

でも、何回か子どもたちと席の決め方の話しをするうちに、段々
と自分たちで折り合いをつけていけるようになっていった……と思
う。

こういったさばきかたも、いとこたちとの間で学んだことだ。

一人っ子の私が、なんだかんだと言いながらもこうして子どもた
ちと付き合えるのも、そういった経験の賜物なのだ。

落ち着いたところで、みなをぐるっと見回した。子どもたちの表
情をチェックするためだ。

トイレに行きたそうな顔の子や、あまりにも変な表情をしている
子がいらない限り、私はいつもそのまま話を始めた。

たまに、私がこうして見回すだけで「やっぱ、席変わる」と、強
引に決めちゃったと思われる子が他の子に席を譲る場面も見られた。
それはそれでいいのかなって思うし、そういったのも面白いなっ
て思う。

今日の物語は「北風と太陽」のアレンジだ。

趣味で書くときは、結構マニアックな物語も題材にするけれど、
子ども相手の時は有名なものを取り上げるようにしている。

そのほうが、もとの物語を知っている分、楽しいのかなあと思う
反面、あまりそこには拘らなくてもいいのかなあと思う時もある。
そこらへんは、まだ今一つ掴めていないところだ。

そもそも私が取り上げる物語は、それ自体が既に完成されたもの
で、はつきりいってしまえばアレンジの必要なってこれっぽっちも

ない。

わかってはいても、ついついこの物語に他にも道があったのなら
どうなるかなあ、と私は考えてしまう。

それは、お母さんがダイエットすると言いつつもコーヒーに砂糖
を二杯は入れてしまうのと同じくらい、仕方がないことなのだ。

そうせずには、いれないのことなのだから。

そういった私レベルの問題とは別に、こんな話をいところたちなら
ともかく（まあ、そこは親戚ってことで）、よそ様の子にしちゃっ
ていいもんなんだろうかって葛藤はあった。

しよせん私の語るそれは、ほら話だと自覚があったから。

でも、私が話すことで、オリジナルを読むようになったとか、物
語が好きになったという声を聞くと、私みたいな存在もありなの
かなとは思うようになった。

でも、胸を張って、とまではいかない。まあ、こそこそとやって
いるといった感じだ。

「冬のある日、北風は太陽のところにくるとこう言いました。太陽さん、太陽さん。あなたとぼくのどちらが偉いかを決めませんか」

「北風と太陽」はイソップ寓話だ。

「イソップ童話」として馴染んでいた私は「寓話？」と思ったけれど、調べると寓話とは道徳的な内容が含まれる物語を指すそうであるほどなあと考えた。

イソップ、イソップと当たり前のように私たちが呼んでいるこの人物は、紀元前の生まれのギリシャ人で、奴隷だったともいわれる。詳細は不明だ。彼に関して調べると果てがないように思えた。なにせ大昔の話である。

けれど、もしこの情報が本当だとすると、紀元前の人に関わった物語が、ネットだゲームだといわれる今の世でも、私を含めた日本の子どもたちが一度は聞いたことがある物語となり残っていることは、愉快に思えた。

世の中がどんなに変わっても、人の本質は変わらないって、だから通じる物語なんだって思うことができたから。

「北風と太陽」の続きはこうだ。

北風と太陽は、旅人の上着を脱がせたほうが勝ちだと決めた。

結果は、太陽の勝ち。

旅人は、北風が吹けば吹くほど上着をぎゅっと体に巻き付け、反対に太陽のあたたかさを感じることでそれを脱いだのだ。

またこの物語には別のバージョンがあつて、それには上着対決の前に帽子対決があり、北風が勝っている。

初めてこの物語を聞いたとき、太陽が勝ったことに胸がすつとした私だが、しばらくするとどうして勝負をしたのが、北風と太陽だけだったのだろうと思い始めた。

例えば、雲が参加していたらどうなっただろうと。

北風といると良い存在の太陽が、雲がくることでかわるんだろうかつてことも気になった。

そう思った思いが、今回の物語の発端だ。

物語に対し、こうしたらどうかと思うことはよくあることだけど、それはあくまで自分の頭の中だけのことだ。

これを誰かに物語として話すとなると、それなりの展開やオチも必要になってくる。聞く方が、納得できなきや物語の意味がない。ここが、一番頭を使うところだった。

「北風さん、太陽さん、こんにちは！　そこにやって来たのは、空にぶかぶかぶかと浮かぶ、ねずみ色した雲でした」

雲の登場で、物語はイソップから私の物語への扉を開けた。

「雲？」

「雲だって！」

子どもたちから、興味津々の声があがる。
これが快感。

よしよし、と微笑んだら、オトコマエと目があった。

……なんかいやな感じ。

「やあやあ雲さん、こんにちは。北風と太陽は、ぷかぷかと浮かんでいる雲に挨拶をしました。雲はにこにこしながら、北風さん、太陽さん、いったいなんの相談をしていたんですか？　と尋ねました。すると北風は、実はぼくたち、勝負をしようと話していたところなんだ、と威張ったように冷たい風をぴゅうと雲に吹きました。勝負、ですか？　雲が聞くと、今度は太陽が、そうなんですよ、私と北風さんのどちらが偉いか、勝負をするんですよ、と少し威張った声で言うと、ぼかぼかとしたあたかな日差しを雲に向けました。するとどうしたことでしょう。その勝負にぼくも参加させてくれませんか、と雲が言ったのです」

「雲が？」

「雲なんて」

「なにも武器ないじゃん！」

予想通りの反応に、またにまり。

そしてみんなのその思いは、北風と太陽と同じでもあることも、物語を続けながら語った。

「ちょうどその時、お母さんと女の子といった親子連れが、道を急いでいる姿が見えてきました。

女の子はまだ小さく、腕には大きなクマのぬいぐるみを抱えています。

お母さんは、急いでいました。

ああ、早く帰って洗濯物を取り込まないと。

それにそれに、夕飯の材料も買わないと。

お母さんには、しなくちゃいけないことが、たくさんあったのです。そのことだけを考えていたので、女の子を引きずるようにして歩いていることに、少しも気がつきませんでした。

お母さんに引きずられながら、女の子はぬいぐるみを見ていました。ぬいぐるみの手にある風車が、かみぐるま気になっていたのです」

クマのぬいぐるみが風車を持っているんだよ、ってことをアピールするために、みんなに見えるように手を上げると、徐にぎゅっと握った。

集まる子の年が少しばらけていたので、言葉だけじゃなく、ゼスチャーを入れたほうがわかりやすいかなと思って、たまにこうしたこともしていた。

でもこれをあまりすると、お話会じゃなくて一人芝居になってしまうので、その加減は難しいなと思う。

「北風は、風車を見るとにやりと笑い、誰があの子を笑わせることができるか勝負しようと言いました。

そして、風をぴゅうと吹き、風車を回したのです。
クルクルクル。

風車は勢いよく回り始めました。

それを見た女の子は、嬉しそうに笑いました」

「なんだよ。だったらもう、北風の勝ちじゃん」

「ああ、もう、終わったあゝ」

「そんな、まだわかんないよ」

「そうだよ」

子どもたちのいろんな意見が出る。これも楽しい。私は物語を続けた。

「北風は、自分が勝ったと思うと嬉しくなりました。

そして嬉しくなった北風は、嬉しくなりすぎて、ぴゅうぴゅうぴゅうと、風をたくさん吹いたのです。

風車が回って喜んでいた女の子でしたが、ぴゅうぴゅうと吹く北風に、ぶるぶるっと震えました。

そして、クシュンとくしゃみを一回しました。

お母さんは、女の子のくしゃみに気がつきました。

そして、自分のマフラーを外すと、それを女の子の頭から首へとぐるぐる巻きにしたのです。

ハァークション！

寒くなったお母さんは、大きなくしゃみを一回すると、また女の子を引きずるようして歩きだしたのです。

それを見た北風は、しまった！と思いました。

そんな北風の隣で、次は私の番ですね、と太陽が笑いました」

子どもたちは、黙ったままじっと私の顔を見ている。集中している。よしよし。

8 (後書き)

「」の中の物語ですが、字が詰まると読みにくいと思い、一文ごとに改行しています。

「太陽は、ぽかぽかとした日差しを親子に送りました。

すると、女の子にマフラーをあげ、寒い思いをしていたお母さんの顔が、笑顔になりました。

あたたかくなって、ほっとしたのですね。

その笑顔を見た太陽は、もっともっと喜んでもらいたくて、ぽかぽかの日差しをたくさんたくさん送りました。

ぽかぽかぽか。

すると、どうしたことでしょう。

お母さんの顔から、笑顔が消えました。

女の子が立ち止まりました。

お母さんもつられて止まります。

女の子は、ぐるぐると巻かれたマフラーとコートを脱ぎだしました。暑くなってきたのです。

慌てたお母さんは、女の子が外したマフラーを自分の首に巻き、女の子が脱いだコートを手に持ち、さらに女の子のぬいぐるみまで持ちました。

マフラーにコートに、ぬいぐるみ。

暑くなったお母さんの顔は、おさるさんのように真っ赤っかです。

汗も、だらだらと出てきました。

とても苦しそうな顔です。

それを見た太陽はしまった！ と思いました。

そんな太陽の隣で、次は私の番ですね、と雲が言いました。

雲は、太陽と親子の間にずっと入ると、陰を作りました。

すると、お母さんの赤かった顔は元通りになりました。

女の子もお母さんが持っていたコートを着て、クマのぬいぐるみも自分で持ちはじめました。

二人は顔を見合わせると、くすくすと笑いだしました。

なんだか変なお天気だったわね、とお母さんが言うと、変な天気だね、と女の子も言いました。

そして二人はもう一度、くすくすと笑ったのです。

そのとき初めて、お母さんは、女の子が持つぬいぐるみに、風車がついていることに気がついたのです。

お母さんは女の子の頭をそつと撫でた後、少し屈み、ぬいぐみが持つ風車へ、ふうと風を送りました。

クルクル。

風車は回ります。

それを見た女の子は、自分でもふうと息を吹きかけました。

クルクル。

風車が回ります。

女の子の顔が、笑顔で輝きます。

それを見たお母さんの顔も、笑顔になりました。

お母さんは思いました。

このお天気なら、急いで洗濯物を取り込まなくてもいいわね。

それに、夕飯の買い物だって、考えてみたら昨夜のシチューがまだ残っていたじゃない。

お母さんは女の子と手を繋ぎました。

そして今度は、女の子の歩く速さに合わせて、ゆっくりと歩き出したのです」

聞いている子たちの顔も、物語の女の子と同じように輝いている。

「ずるいずるい、雲さんずるい！

突然、大きな声がしました。

北風です。

北風はそう言って怒りだすと、雲に向い風をびゅうと吹きました。だってだって雲さんは、ぼくと太陽さんが寒くしたり暑くしたりしたから、勝てたんですよ。

ってことは、ぼくたちがいないと勝てないってことですよ。

そう思わないかい、太陽さん！

雲の勝ちだと思っていた太陽も、北風の話聞いているうちに、それかもしれないなあと思い始めました。

でも、何かが引っ掛かります。

……ええと、うん。でも。

太陽は一生懸命考えます。

そして、自分たちが、寒くしたり暑くしたり親子を思い出しました。待って、待って、北風さん。

私は、この勝負に勝ったのは、やっぱり雲さんだと思います。

北風さん、思い出して下さいよ、あの親子のようすを。

太陽に言われて、北風も一生懸命に思い出しました。

そして、わかったのです。

雲があの子二人に、笑顔を与えたことを。

北風は、女の子のこじしか考えませんでした。

そして太陽は、寒そうなお母さんに気がいってしまいました。けれど、雲はお母さんと女の子、二人のことを考えたのです。

二人を笑顔にしたのです。

北風と太陽は、雲に謝りました。

何にもできないと思って馬鹿にしていた雲に、謝ったのです」

お話会が終わる頃になると、子どもたちの親や家族が公園にちらほらとやって来た。

一旦、休憩をしたあと、みんなで「だるまさんが転んだ」を何回かしてから、会をお開きにした。

お開きにした、んだが。

「なんでまだいるの？」

私の側にぴたっと張り付くミチカはともかく、例のオトコマエまで私の側にぴたっという。

結局この男は、話を最後まで聞いていただけでなく、「だるまさんが転んだ」にまで参加してた。

「うん、実は、三矢さんをお願いがあつて」

オトコマエは、その武器ともいえる笑顔をピカーッと私に向けてきた。

おおっ。ま、眩しいぞ、おいっ！

「な、なによ。お願いって」

決してうぬぼれるわけではないけど、男が女に向ってお願いといえば、なんとなあく期待……でなく、予想はできる。

しかし、待てよ。

名前も思いだせないような人からの、そういったお願いを受けてもいいんだろうか。

いや、う、受けるなんて。受けるなんて、まだ決めてないし。

「スカウト」

——ん？

「え？ ス？ スカ？ 今、なんて言ったの」

「うん。スカウト。ぼく、三矢さんをスカウトしに来たんだ」
スカウト？

「やだ。もしかして、球団関係者？」

スカウトといえば、プロ野球だ。

「え、なんで？」

そう言うのと、オトコマエはケラケラと笑いだした。球団って。

「なにそれ、三矢さんって、野球選手を目指しているわけ？」

「いえ、全く」

ないな、ない。

これは完全に色恋の話じゃない。

ちよつと残念。

いや、ほら、何事も経験っていうからさ。

と、まあ、それはもういいけど。

「で、スカウトって何の？」

興味はそっちに移った。

「ああ、うん。紙芝居」

「紙、え？」

ちよつと待て。

そのキーワード、なんだったっけ。

今、それを聞いた瞬間、頭の中に血の雨がザーッと降ったんだ
だけだ。

「知らないか。知らないよね。あのさ、ぼくたち数人で、紙芝居を
作ってそれを上演するサークルを立ちあげたんだ」

知ってる、というよりも、思い出しました。

更に言うと、目の前のあなたさまの名前も思い出しましたよ。

「ふたまたふたば二股双葉」

「あ、やだなあ。それってそんなに有名？」

少しでも、こいつにときめいてしまった自分を殴りたい。

二股双葉。

当然、あだ名。

本名は、こうだ国府田 ふたば双葉だ。

この男は、去年の暮、件の紙芝居サークルを立ちあげるにあたり当時三年生だった女生徒二人を手玉に取りもてあそんだ挙句、二人とも振ったという伝説の持ち主だ。

その際、血の雨がザーザー降ったとか降らないとか。

文芸部の先輩からも「双葉君ってどんな子」と聞かれたが、こいつとは全く縁がなかったため「さあ」なんてやる気のない返事をした覚えがある。

どうりで見たことがあると思ったはずだ。

彼は、有名人だ。

そんな伝説を持つくらいだから、そりゃ顔だっていいはずだ。間近で見たのは初めてだけど、確かに顔はいい。顔は。

「ええと。お断りします」

紙芝居はともかく、そんないわくつきのサークルなんかには、近づかない方が身のためだ。

「でも、困るなあ」

困れ、困れ、どんどん困れ。

でも私には関係のないことだ。

「ってことで、失礼します」

思いつきりの作り笑いを双葉に向け、ミチカの手を繋ぎ歩き始めると、「今日の物語、面白かったなあ」なんて双葉の声がした。

体は逃げたいのに、耳は聞きたい。

これは、物書きの悲しい性だ。

「ええと、二股……じゃなくて、国府田君。それって、ど、どんなところが、かなあ」

気がつくと私は、双葉に今日の物語の感想を求めていた。

連れて行かれた先は、ファストフード店だった。

「どうせなら、ゆっくりとぼくの感想を聞いて欲しいな」なんて魅惑的なささやきを聞いてしまったのなら、行かないわけにはいかないだろうよ、諸君。

お話会のあとで私と遊ぶ気満々だったミチカを家に届けると、私は双葉と並んで歩いた。

ああ、まるで悪魔に魂を売ったような気がするのは、なぜでしょう。

ああ、ミチカのうるうるとした目を真っ直ぐに見られなかったのは、なぜでしょう。

「三矢さん、なんか……大丈夫？」
はっと意識を戻す。

なんと、私たちは既に店内にいた。
おそらく、「ミチカのうるうるとした」あたりで自動ドアを踏んでいたんだと思う。

そういえば、扉が開いた状況は、目に入っていたわ。

私は双葉の分まで飲み物代を払うと（まあ、なんとなくね）、トレイを持った双葉の後ろを歩いて階段を上った。

二階は禁煙席だった。

人が少なくて、ほっとした。

……なんとなくね。

少し歩くと、双葉が「あ、来てる、来てる」と声を上げた。
ひょいと双葉の後ろから顔を出すと、少し先に一人の女の子が立っていた。

……うーん。これまた、知った顔なんですけど。

「双葉、遅いよ」

彼女は双葉を睨むと（といっても本気のやつじゃない）、私の顔を見て「たは拿捕されたか、三矢さん」と鈴を転がすような声で言った。
拿捕って、あなた。

私を見て拿捕拿捕言っている、この鈴転がしの令嬢は、放送部の
おかむら岡村 いちこ以知子だ。

彼女とは、一年の時に同じクラスだった。

その時、聞いた話によると、中学の頃から放送一筋で、コンクールにも出ているらしい。

ハネグンの運動会や文化祭での放送も、全て彼女にお世話になっている。

岡村 以知子の声を知らない奴はもぐりだと、ハネグンでは言われるほどだ。

岡村さんは、声だけでなく顔もすっきりとした良いお顔だ。

彼女の将来は、どこかの局のアナウンサーだと思っているのは、私だけではないだろう。

その岡村さんが、なぜここに？

「三矢さんも、双葉の美貌に陥落したか」
だから、陥落って、あなた。

「あ、陥落？　違う、違う。やっぱり、そっち系では駄目だった」

おいおい！

なんだ今の台詞は！

「そっち系」って、なんだね。

で、「やっぱり」って、どうやっぱりなんだよ。

目をまん丸にして、二人を交互に見ると、「あら、来た、来た」と今度は岡村さんが言った。

誰が来たんだと振り向くと。――振り向くと、そこには壁があった。

「うわあ、^{しじょう}四条！　おまえ、ほんとに、甘い好きなんだなあ」
パイにゼリーにアイスまでって、うわあ。口の中が、あまあましてくるよ、と双葉がぶるりと震えた。

私は壁から二歩ほど下がり、ぐんと首を上げその全容を眺めると、そこにはたしかに^{しじょう}四条 ^{まひる}克がいた。

まるで格闘家のような体形をした四条君が、虫も殺さぬほど大人しくインドア派なのは、学年のみなが知るところ。

というのも、彼は一年次文化祭の、見た目と中身の「ギャップコンテンツ」の優勝者だったからだ。

四条君は、手芸全般や絵を描いたりとか、そういったことが好きなのだそう。

実際そのコンテストでは、四条君が作ったパッチワークの枕カバーが披露された。

パッチワークというと、作品もおとめチックなものを想像するだろうが、四条君のそれはモノトーンな色合いで、男の子っぽかった。へえ、こんなのもアリなんだなあと、自分の思い込みが一新されて、驚いた記憶がある。

その四条君が、甘いものが大好きなスイーツ男子だとしても、素直に納得できることだった。

そしてそんな四条君や岡村さんを見ているうちに、私の中にあつたもやもやとした思いが、ふいに形となり目の前に現れた。

「ん？ ああ？ あー！ ああ、そうか、これ紙芝居のメンバーってことね」

双葉との話を思い出すと、こういった展開は充分アリだ。

なのに、今頃になって気がつくなんて、遅すぎる。

「ってことはさあ、国府田君。……感想なんて、嘘なんですよ」
双葉は、何も言わずににこにこしている。

ああ、双葉め！

物書きの純情を返せ！

でなきゃ、せめてコーヒー代百五十円を返せ！

誰もいなけりゃ、髪をかきむしりたいところだった。

そんなこっちとは違い、人をだましながらも優雅に笑い、しかもその姿もまた美しい双葉を見ていると、こいつをコールドタールよりも黒くドロドロとした罠に、思いつきり嵌めてやりたいといった強い欲望が生まれた。

生島に連絡しちゃうか。

「あ、三矢さんの目つきが、極悪だ。でもさ、その怒りの矛先は、ぼくでなく夢にしてね。ぼくは、お告げ通りに三矢さんを連れてきただけだから」

「……え？　夢？」

夢って。

「そう、夢のお告げの夢」

ああそういえば、一番最初に私を見た時、双葉はそんなことを言っていたっけ。

私はそれをてっきり、「双葉が見た夢」の「お告げ」だと、勝手に思ったけど。

「あ、ごめん。三矢さん。俺が双葉に頼んだんだ」

声のする方向に視線を戻すと、四条君の後ろからひょいと顔を出

した男子がいた。

その顔の出し具合が、さっき私が岡村さんを見ようと双葉の背から顔を出したのと似ていた。

親近感というか、仲間というか、つい顔がほころんでしまう。

けど、四条君の後ろにいた男子はそんな気分ではなかったようで、私と目が合うとぷいと横向いた。

……全く。どいつもこいつも。

「彼の名前は、伍代^{ごだい} 夢^{ゆめ}」

「ねえ、夢」と双葉が呼ぶと、紹介されたその子は「名字で呼べ、アホ」と言った。

確かに双葉はアホかもしれないので、それに文句はないけど、「夢のお告げ」には文句がある。

「あなた、伍代君ね。なんで私を――」

「ねえ、三矢さん。ここ、通るお人の邪魔になると思わない？」

鈴転がし岡村さんの言葉に、私は何の反論もできなかった。

店の奥に行くと、少し囲われた場所に席があり、岡村さんのものと思われる飲みものが置かれていた。

「三矢さんは、私の隣にくる？ それとも双葉の隣？」

ふふふと笑うと、岡村さんは、一番奥の席に座った。

なんで私が双葉の隣なのよと、と鼻息を荒くしながら、岡村さん

の隣へと座った。

双葉は岡村さんの前に座わり、その隣に夢……じゃなくて伍代君が座った。

そして、お誕生日席には四条君が座った。

飲み物しかない私たちに比べ、四条君のテーブルの前は華やかだ。

「四条、アイス溶けるぞ」

伍代君の言葉に四条君は頷くと、両手を合わせ食べた。

ここのアイスは、そのカップの大きさで获得感を打ち出していて有名なのだけど、四条君が持つとそれが全く大きく見えなかった。

「四条君って、何センチ」

「18……5か6」

「へえ、また伸びたんだあ」

双葉が驚いたように、言った。

「ねえ、いつ頃から伸びたの？」

「あら、三矢さんって身長伸ばしたいの？」

そう言う岡村さんは、長い足を組み替えた。

今のは……わざとか？

12 (後書き)

「通る人」でなく、「通るお人」とわざとしています。

「伸ばしたいよ」

ゆうに160は越えてそうな岡村さんには、わかるまい。

「ふーん。でも、それくらいの方が、もてるよ」

はあ？

「それくらいでも、もてませんが」

「……あのさ。もう、身長の話は、とりあえずやめにしてさ」

伍代君は、ずずずと勢いよくドリンクを飲むと、どんとそれを置いた。

「でもさ、知りたくない？」

ね、知りたいよね、と共感を求めるように伍代君を見ると、「全く、これっぽっちも、一ミリたりとも知りたくない」と返ってきた。

うーん、そうか。

180を越える四条君に、160は越える岡村さん。

そして、四条君には追いつかないまでも背の高い双葉。

そのグループに対して、150をようやく越えた私と、たぶん岡村さんと同じくらいの身長 of 伍代君は同じグループを形成している仲間だと思ったけど、違ったか。

こりゃ、失礼。

「で、国府田君。百五十円返して、もしくは感想をちょうだい」

双葉に、手のひらを向けて差し出す。

双葉がその上に、自分の手を乗せてくる。

見つめ合う……というよりも、探り合う目と目。

「感想はさ、今度、二人になったときに、ゆっくりと話すよ」

ないな、ない。

こいつからの感想は、一生ない。

ついでに言えば、百五十円も返ってこん。

双葉に向けた手を素早く引き抜くと、奴の手の甲をぴしやりと叩いた。

「で、伍代君。なに、なんなの、夢のお告げって」

ずっと伍代君に向き直り聞くと、伍代君がむせた。

「……げ、げほっ。あ、三矢さんって容赦ないね」

「うん。それ、捨てたから」

私の言ったことがツボにはまったのか、岡村さんが笑いだした。見ると、四条君と双葉までが笑っている。

「あー、お告げなんて言葉は、双葉が大げさに言ったのであって」
伍代君の言葉に、キレがない。

「あの、俺らさ、紙芝居を作るんだけど」

「うん、それはこの人から聞いた」

双葉を指す。

「うん。それでさ、絵を描くのは四条がいるし、話を朗読するのは以知子がいる。でも肝心の、物語を考える奴が……いない」

伍代君の言葉に、いきなりその場がお通夜のように暗くなった。

「最初はさ、双葉の知り合いがそういった創作活動をしているとかで、参加してくれる予定だったけど」

その話にアンテナがたつ。

「それが、血の雨？」

岡村さんに聞くと、「そ。迷惑な話よ」と返ってきた。

双葉が連れてきた人たちは、噂通り、当時の三年女子生徒で、二人で創作活動をしていたそうだ。

だったら文芸部に入ってくればよかったのに、と思うが、生島のようにみんなでの活動が面倒だと思う人もいるわけで、そこらへんは仕方ない。

岡村さんは、ふうとため息をつく。「悪い人たちじゃなかったのよ。でもさ、紙芝居にどろっどろの恋愛話は、ないっていうか」

夜の町をさまよい歩いたり、補導されたり、そこで不良に絡まれてミステリアスなクラスメイトに助けてもらったり。

岡村さんの語るそれは、結構面白そうだ。

「嫌いじゃないけどな、そういった話」

そう私が言うと、岡村さんも「実は私も嫌いじゃない。その人たちの原稿、すっごく楽しく読んだし」と笑った。

「でまた、すごいだよ。そのクラスメイトというのが。実は某国の情報部員で、情報活動中に主人公を助けたってわけよ。ロマンスでしょ」

「う、うわあ、尊敬する。そんなドラマチックな話、私には考えられないもん」

童話メインの私からすると、それは神の領域だ。

「ふふふ。二人で考えて、一生懸命書いたみたいなんだけどさ。でもさ、紙芝居なんだよね、お子さま向けの。紙芝居の原稿を頼んだら、情報部員がでてきてさ」

それを読んだ夢が激怒して、双葉ともみ合いになって、それを見ていた三年生が泣き出して、夢に殴られた双葉がよろけて、三年生がそれを助けようとして鼻をうって。

——鼻血が出たらしい。

「もしかして、それが流血事件の真相？」

「そう。まあ、そのあとにね、鼻血を出した彼女たちに双葉が駆け寄ったら『きゃー！ 近づかないで！』って血のついた手で双葉を

ビンタして」

そりゃ、まあ、鼻血を出している姿を、王子様みたいなの男に見られたくはないわな。

乙女心としては。

「噂って、本当のことと随分と違って流れるもんだしね」

「そうなのよね。でもね、その人たちが双葉のことが好きで、もめていたのは事実だから」

「ねえ、双葉」と岡村さんが言うのと、「まあ、人の心は、どうにもできないからねえ」と双葉が答えた。

どうにもできない想いなんて、こいつには縁のない悩みなんだろうなと思うと、途端にその人達が気の毒になった。

「事前に、どんな話を書くか確かめなかったの？」

私の問いに、伍代君が項垂れ、双葉は肩をすくめた。

そうか、確かめなかったのか。

それって、どうなんだろうと思う。

書き手としては、確かめてくれよ、と思う。

書いた揚句、その物語のことで他の人が揉めるなんて嫌な話だ。

まあそもそも、紙芝居にそんな話を書いちゃうのも、アレレなんだけど。

双葉は、伍代君に殴られたのか。

そしてそのあと、血まみれのビンタ。

「国府田君って、弱いんだね」

「んー。まあ、あのときは、たまたまね。それに、ぼくだって男の子だから、やるときはやりますよ」多分ね、と双葉が言った。

ふーん。

「で、伍代君。なんで私に声をかけてきたの？」
「うっ。まだその話が終わっていなかったか」

そう言う伍代君は、「絵本にする物語は、オリジナルがいいんだ」と言った。

「三矢さんは、物語を書く人だろ。子どもに向けてのものを書く人だろ」

伍代君が必死な顔で私を見てきた。

その必死さにどうしていいかわからず、視線が泳いでしまった。

「そりゃ、まあ、私が書くのは子ども向けのものだけど」
「だけど。」

「そんな、伍代君が言うような、オリジナルかって聞かれると、それは微妙に違うっていうか」

ねえ、とついつい双葉に応援を頼んでしまう。双葉は、今朝、私の物語を聞いた証人だから。

「おもしろかったよ、三矢印の『北風と太陽と雲、時々おかん』」

双葉のネーミングセンスに唸る。

私はリリーさんかよ、とつつこみつ、実はそういったネーミング、嫌いじゃない。

好きだ。

「あの、違います。『北風と太陽と雲』です」

シンプルです、シンプルと私は言った。

「『おかん』は、なしかあ」と岡村さんが言う。

「でも、話には、おかんが出てきたよ」と双葉が言う。

はいはい、出てきましたとも。

「ふーん。『北風と太陽』ってイソップの？」

四条君に聞かれ頷く。

四条君の声って、優しいな。

「そののアレンジか。おもしろそうだね」

アイスを食べた四条君は、ゼリーに手を伸ばした。

うっ、ちよつと。

見ているだけで、胸焼けがしてくるんですが。

「あのさ、質問してもいい？」

伍代君に向かい聞く。

「私が物語りを書く人だからってことでも、なんで？　つまり、なんでオリジナルにこだわるの？　そんな面倒なことしなくても、いくらでも名作と呼ばれる物語はあるでしょ」

なにもわざわざ、私の物語を紙芝居にすることは無いと思う。

意味がわからない。

「どの物語にしているのかわからなくて、それでオリジナルにしたっていうんなら、いい物語を選ぶ手伝いをするよ？」

でもそうすると、私よりも図書委員で適役の子がいる。

その子を紹介してあげても、いいかもしれない。

「だめなんだ。ともかく、そのままはだめ」

伍代君がそう言うのと、またみな、お通夜のように沈んだ表情になった。

「なんで」

何に拘っているのか。

意味がわからん。

「それは、そういったことをする奴らは、既にいるから」
悔しそうな声で、伍代君は言う。

「そりゃ、いるっでしようよ。っていうか、フツーそうだよ」

伍代君は、いったい何が言いたいのか。

「だから、他の奴がやっているようなことは、したくない」

はあ？

「なんで」

伍代君が、ごくんと唾を飲む。

「約束……してしまったから。誰も知らない物語を届けるって、約束を」

伍代君は机の上の紙コップを、睨むようにして言った。

「約束？」

「うん」

それきり黙ってしまった伍代君のフォローを、ほかの三人の誰もする気配はない。

どうなってるの。

うーん。困った。

「……ええと、つまり、誰も読んだことがない物語を、紙芝居で見せると約束した、と」

「うん」

おおい！ 誰か、フォローは！

「ええと、伍代君。それは、誰に約束をしたのかな？」

まるで、ミチカたちを相手にしているような気持ちになる。

「えっ。俺、言わなかったか」

「うん、夢。言っていないよ」

双葉がようやくフォローした。

伍代君はきょとんとした顔の後、いきなり笑顔になった。

「そっか、そっか。それは悪い。約束をしたのは、入院している子どもたちなんだ」

伍代君はそう言うと、病院名も告げた。

「あと、そこから退院して近くの小学校に通っている奴らもいるんで、その小学校とか」

伍代君が名前を挙げた中には、ミチカが通う学校もあった。なんでも話はあると聞いて、あとはブツさえできればGO！ってな状況らしい。

「そっか。うん、まあ、なんとなくわかったけどさ……」

そっちの事情は、わかったような気がするけど。

「くどいようなんだけど、なんで私？　どこでどうして、私に白羽の矢が立ったのかな」

伍代君が、また黙ってしまう。

今から彼のことは、だんまりの伍代と呼ぼう。

そして伍代君が黙ってしまったても、フォローしてこない三人も三人だ。

こうしてこの場にいるわけだから、至少くはい何かを知っているだろうに。

はあ、というため息が沈黙を破る。

岡村さんだ。

「もう、しょうがないなあ。あのね、私が夢に言ったの。三矢さんがいいんじゃないのって。一年で同じクラスだったから、三矢さんがそういうことができる人って知っていたから」

岡村さんがそう言うと、伍代君はぎこちなく頷いた。

ふーん。

岡村さん、からか。

「そっか。でもさあ、だったらなんで伍代君が来なかったの？　国府田君じゃなくて」

「あ、それは、つまり、双葉が行った方が、ことがスムーズに運ぶ

「思っ

ふーん。

スムーズねえ。

「で、伍代君はさ、随分と物語にこだわりがあるようだけど、私がどんな物語を書くかは知っているの？」

すると伍代君は、またまた黙ってしまった。

……知らないんだろうな。うん。

物語のことで双葉を殴った伍代君と、なににあまり私の書く物語を知らないその姿にギャップを感じる。

もやもやとする。

「味のわからない店のクリスマスケーキは、怖くて買えないもんな」ゼリーを食べ終わった四条君がそう言うのと、

「あ、わかる。私も自分の声を見こまれてアナウンスを頼まれるのと、上手いんだからやって、とかそういったザックリとした依頼をされるんじゃない気持ちじゃ全然違うし」と岡村さんが言った。

そうそう。

そーいうこと。

プロじゃないのに、なにを偉そうなことと言ってと思うかもしれないけど、あるのだ、心の中に。

他の人から見たら、アホらしくてちっぽけな、でも自分にとっては大事な気持ちだ。

それに、あの三年生の二の舞にはなりたくないなあといった気持ちも、正直ある。

「冬のある日、北風は太陽のところにくるとこういいました。太陽さん、太陽さん。あなたとぼくのどちらが偉いかを決めませんか」
双葉はそう言うと、私ににこりと微笑んだ。

え、なに？

それって、さっき私がミチカたちにしたお話じゃない。

私が驚いているのがわかっていくくせに、双葉は構わず話を続けた。

「そうきたか、双葉。あいつ、暗記が得意なのよね」

岡村さんがこそりと言った。

「地歴公民、毎回満点」

「ひっ」

「いやみな男よね」

いやみ、っていうよりも、すごい。

そして、あれよあれよと言う間に、双葉はほぼ完璧に「北風と太陽と雲」を語り終えた。

「いいね。絵が浮かぶよ」

「私だって、今の双葉よりうーんと上手に語れるわ」

思いがけずもらった、四条君と岡村さんの感想に、どきまぎとする。

「単なる力比べで終わらなかったところが、好きだった」

伍代君の感想だ。

感想はうれしい。

私の物語は、いつも小さい子たちが相手なので、笑ったり泣いたり、お話の最中のその子たちの様子といったものを、「感想」として受け取っていた。

文系部の先輩が在学中は、今みたいな感想を貰ったが、卒業してからはこういった感想はなかっただけに、どきどきもしたし、ありがたかった。

でも、感想よりもなによりも、あの双葉が、ちゃんと私の話を聞いている、覚えていたってところがダメだった。

陥落。

岡村さんの言葉を思い出す。

そして思った。

きっと去年の三年生も、双葉の外見だけじゃなく、こうした物書きの悲しい性をくすぐるようなところに、執着したに違いないと。

大きく深呼吸をした。

そうしないと涙が出そうだった。

「……五代君。今、国府田君が話してくれたように、私の物語は、完全なるオリジナルとはいえないよ」

じつと伍代君の顔を見る。

伍代君が頷く。

「私、嫌だからね。殴りあいはいは
ぱっと伍代君の顔が赤くなる。

「うん。わかった。しない」

よしと思う、伍代君に手を伸ばす。

「じゃあ、よろしく」

私の右手は、伍代君の両手にかっしりと掴まれた。

「ありがとう」

黙りの伍代はそれだけ言うと、やっぱりそのまま黙ってしまった。

「え、ここ？」

「うん。今年潰れた部があって、その部室が空いたから、使っているって。運がよかったよ」

「……誰が」

「え？」

「誰が、使っているって？」

「えっと、国語の山が」

週明けの月曜。

紙芝居サークルとして活動する部屋を、学校から融通してもらったと話す伍代君のあとをついていくと、そこは文芸部部室だった。

「文芸部、と。よし」

伍代君は、預かった鍵と扉に掲げられたプレートの名を確認したあと、部室の扉をあけようと鍵を差した。

「あのさ、私が以前、どこの部にいたか知ってる？」

「え？ 三矢さん、クラブに入っていたんだ」

そう言いながら、伍代君が鍵を回した。

「うん。文芸部」

伍代君の動きが止まる。

「あ、いじめっ子がいる」

スタスタと廊下を歩く音とともに、双葉の声がした。

「固まっている」

四条君がちよんとつくと、「あ、ああ、あ。み、三矢さん」と、伍代君は勢いよく私を見ると、「ごめん」と体を45度まで曲げて謝ってきた。

「なんで、夢が謝るの。部が潰れたのは、ひとえに三矢さんの営業努力が、足りなかったからでしょ」

双葉がすばりと言う。

その通りなだけに、ムカつく。

「別に、伍代君に謝ってもらいたいと思ってないから。そんなつもりで言ったんじゃないし」

「ただ言ってみただけだよ」

四条君のナイスフォローに、大きく頷く。

「国府田君って、短絡的？」

ここぞとばかりに言い返すと、カチャリと鍵の開く音とともに、「ほら、部室を開けたよ」と四条君の声がした。

紙芝居は、一作だけでなく何作か作ろうというところまでは、フアストフードで決めていた。

私はあれからすぐに家に戻ると、今まで書いたものの題名と簡単なあらすじを、みんなに送った。

メルアドは、あの場で交換済み。

その意見をふまえて、いくつか原稿を持ってきたけど、その中で一番尊重したのが、絵を担当する四条君の意見だった。

あの場で、私の話を聞いた四条君が言った言葉が、「絵が浮かぶよ」だった。

だから、描き手として、絵が浮かぶ物語と、そうでないのがあるかもしれないと思ったからだ。

絵がないと紙芝居にならないし、絵が描けるのは四条君だけみたいなので、そこところは大事だと思った。

入り口ですったもんだあったものの、懐かしくもなじみのある席に座ると、まるで文芸部が復活したような気持ちになる。

私が原稿を机の上に載せると、双葉や伍代君が手に取り、それらを読みだした。

二人は「書かない人」だ。

「書かない人」に、目の前で原稿を読んでもらうのは、あまりない経験だ。

思いのほか、恥ずかしいと感じた自分に驚く。

私の横に座った四条君は、大きな布の袋から「これ、近くの図書館で借りただけど」と、紙芝居を出した。

「一枚目が題名で、一枚目についてのコメントは、最終ページの裏にあるんだ」

紙芝居は、勿論見たことはあったけど、こうして作る側として現物を手にしたのは初めてだった。

紙芝居の裏は面白い。

そこは、上下にわかれていた。

上には、主に台詞。

そして下には、その台詞の読み方の指示が書かれていた。

指示には、「大きく」、「小さく」、「はやく」、「ゆっくり」といった朗読をするときの声の調子が書かれていた。

こういった指示があるってことは、読みかたにメリハリが必要だってことだろう。

話を作れば「はい、おしまい」じゃなくて、こうしたことも決めていくんだろうな。

それに、場面に合わせた台詞のチョイスも必要だ。

つまり、一度書いた物語を、今度は紙芝居用の脚本に起こし直すってこと。

四条君の絵との兼ね合いもある。

むむむ。

ってことは、どんな順番で作業すればいいんだろう。
うーん。

頭が熱くなってきた。

紙芝居を作るってことを、甘くみていたなあと思う。
ふと、出来るんだろうか、と不安になった。

「これ、紙芝居の紙」

穏やかな四条君の声とともに、私の目の前に「紙芝居キット」なるものが置かれた。

「開けていいの？」と聞くと、四条君が頷いた。

大きくしつかりとした紙の封筒の中に、真っ白な用紙が入っている。

十二枚セットとあるので、そうなのだろう。

ということは、十二枚までで物語を終わらせることが、一応の目安か。

その用紙は、表は真っ白だけど、裏には既に台詞や指示が描きやすいように罫線があって、それに従い書けばいいようだった。

さっきまでの途方にくれ具合が、少し弱くなった。

頭の中でいろいろと想像すると不安になるけど、こうして現物が目の前にあって、するべきことが見えてくると楽なんだな。

しかし。

「ねえ、そういえばこの紙代、どうしたの？」

高いか安いかさえわからないけど、無料ってことはないだろうか
ら。

気がつくとは私は四条君の答えも待たずに、「私も払うし」と言っていた。

「三矢さん、落ち着いて落ち着いて」
双葉だ。

「お金のことは大事だけど、先生にも相談しながらやっているし」
ねえ、夢と双葉が伍代君に振る。

「そ、そう。うん。サークルとはいえ、学校で行う活動だから担当の先生もついているし」

「……その担当が、山中先生か」

私の突っ込みに、また伍代君が黙る。

「ちょっと、国府田君。今の伍代君への振りって、意地悪だったよね」

私からの突っ込みが入るのがわかっての、計算が見えた。

「国府田君って、いじめっ子だね」

すると、「お互いね」と双葉からの軽やかな返しが来た。

声の調子だけでなく、紙芝居には、さらに指示があった。

「さっと抜く」

「ゆっくりと抜く」

紙芝居のこうしたさばきかたは、劇でいえば演出に当たることな
んだろうな。

声の調子も合わせ、こういった演出を実践するのは、岡村さんだ。
岡村さんは、今日は欠席だ。
本分である、放送部に出ていた。

「最悪、以知子は、読むときだけの参加になるかも」

それは、ファストフード店で、告げられていたことだった。

つまり完成した紙芝居を彼女に渡し、個人練習で本番に臨むって
ことだ。

パラパラと紙芝居を捲りながら、上演当日、一番負担がかかるの
は、岡村さんなんだなと改めて思った。

放送部だって忙しいだろうに、紙芝居まで大丈夫なんだろうか…
…。

それとも、私にとっては難しく感じることも、岡村さんにとっ
ては朝飯前だとか？

大丈夫といえ、もう一つ気になることがある。

「ねえ、四条君。絵は一人で大丈夫なの？」

そう聞くと、「一人じゃないでしょ」と返ってきた。

「下絵はぼくが描くけど、色はみんなで塗ればいいことだし」
「え、そんなことしていいの？」

てっきり四条君は、最初から最後まで、一人で完成させたいのか
と思ったから。

「作品、じゃないから」

でしょ、と四条君が言う。

「ああ、そっか」

そっか、そうなんだと納得する。

「作品なら、一人で仕上げるけどね」

うんうん、と大きく頷く。

何の接点もないと思っていた四条君と、もの作りってところでわ
かりあえるのが、楽しかった。

そうしている間にも、伍代君と双葉は私の原稿をどんどん読んで
いた。

そしてそこに、四条君も加わった。

静まり返った部屋の中、原稿が捲られる音だけが聞こえる。

むずがゆい。

まるで、心のレントゲンを、撮られているようだ。

けど、嬉しいとも思ってしまう。

ここらへんの気持ちの妙さをわかりやすく言うのなら、指圧の時
の「痛気持いたきもちちいい」って感覚と、同じじゃないかって思う。

痛くても、やめられませんかあ、つてことで。

「三矢さんの、一押しのお話はどれかな」

ふいに、伍代君に聞かれる。

「うーん。一押しかあ。そうだね、この間の『北風』かな」

そもそもが有名な話だし、それに子どもたちの反応も良かった。
手ごたえがあった。

それに四條君も、「絵が浮かぶ」って言ってくれたし。
もし、一作だけならこれかなあ、と思った。

伍代君が、ぱらりと原稿を捲る。

そして、四條君に向い「どう？」と聞いていた。

大きな四條君と、それなりの伍代君。

二人が仲良く顔を突き合わせているは、私に何かの物語を想像させた。

大ぐまと小ぐま。

「どっちに興味があるわけ？」

思考が遮られる。

双葉だ。

双葉を見る。

こいつは、中くらいのくま。

「あ、そっか。『三匹のくま』だな」

「……それ、トルストイの？」

「あ、トルストイが原作ってわけじゃないよ、あれ。日本では、トルストイの翻案が有名だからね」

「三匹のくま」は、ロシアの民話だ。

ある日森に迷った女の子「ゴルディロックス」が、三匹のくまの留守中に彼らの家に入り、大、中、小のスープを飲んだり、椅子に座って壊したり、挙句の果てにはベットで寝ているところを見つかり、すたこらさっさと逃げる物語だ。

伍代君に四條君、そして双葉とこうして部屋にいと、私はゴルディロックスになった気分になった。

あの物語を読んだ時。

そう、あのあと三匹のくまは、どうしただろうってことと、女の子だってあのまま逃げちゃいかんよな、ってことだった。

私なら、壊したものがどうなったか気になるし、できるならそれを修理したいと思うから。

あ、これ、使えそう。

でも、そもそもあんなことしちゃうゴルディロックスは、少し甘えんぼうでわがままな子かもしれない。

そんな子が、スープを作ったり、壊した椅子を直したり、できるだろうか。

そうだ。

出来なかった子ができるようになったとき、自分のしたことが、とても相手の迷惑になったと知るのだ。

知ったらどうするか。

謝りに行くだろう。

椅子を直したり、スープを持って行ったりするだろう。

でも相手はくまだ。

怖いに決まっている。

だったら、くまがいない時に、それらのことをするのはどうだろう。

でもって、念のために――。

「――さん。三矢さん」

大丈夫？ と双葉に聞かれたので、「妄想していた」と答えた。

妄想っていうより、想像？ それとも創造？

「え、夢と四条で？」

双葉はそんな怪しいことを言うと、顔をしかめた。

ふーん。

「うん。そうだよ。あの二人を見てちよつと妄想をしてたの。で、二人じゃパンチがないんで、そこに国府田君も含めてね」と中くらのくまに言うと、すつごく嫌な顔をされた。

誓ってもいい。

双葉は、私がそっち系の妄想をしているって、思っているに違いない。

なんつーこと考えるんだろうね、この男は。

うんにゃ。

もしや、して欲しいのだろうか？

「あの、つかぬことをお伺いしますが。国府田君って、女の子が好きな人だよね」

双葉にそう訊くと、「今までの歴史では、そうでした」と返ってきた。

ふむ。

そうか、そうか。

しかし、その歴史とやらは、さぞ激動であったことでしょうよ。

「ご苦労様です」と私が言うと、「とんでもございません」と双葉が言った。

「あのさ、ご苦労様ついでに聞いてくれる？ 物語ができそうなんだ」

すると途端に三人の顔つきが真面目なものになり、どれどれと興味を示してくれた。

あ、これ。

この感覚。

……病みつきになるかも。

「うん、『三匹のくま』を、もとにした話なんだけど」と、今、頭の中にあるだけの物語をざっと話す。

「そういえば、俺もあの話、気になっていたなあ」
伍代君が言う。

「スーパはともかく、イスはどうしたって」
絵本で読んだとき、イスがかなりえぐく壊れていてさ。

「……ああ、そっか。三矢さんの物語を、子どもたちがあんなに好きなのって」

双葉だ。

「意識の表面に出てくるこないは別として、そういったちよつとしたひっかかりに、落とし前をつけてくれるからか」

「……双葉、おまえ。落とし前って」

「物語に使う言葉じゃないね」

「私も、それは言われたことないわ」

私たちがあれこれ言うと、双葉がむっとした。

「褒めたのに、これだから」

「褒めてくれたんだ」

「これでもね」

わかっていただけ。

「そりゃ、どうも」

「どういたしまして」

この三人といえるのって、案外楽しい。

私が持ってきた物語で、紙芝居に向きそうなものをみなで検討し、結果採用されたものの何作かを四条君が持ち帰った。

四条君は、物語から「場面」にあたる一枚一枚を起こして、紙芝居の案を作ってくれるという。

その案を再びみなで検討し、どの作品を一作目にするか、決めることになった。

私の宿題は、「三匹のくま」を仕上げることだった。

次回の集まりは、水曜になった。

「なんだかよくわからないけど、さよが元気そうでよかったわ」
生島にメールをしたら、そんな返事がきた。

「今一つ実体がつかめてないけど、でも、自分の物語が必要とされるのは、単純に嬉しい」

私は生島にそう送った。

うちの学年は六クラスあって、サークルのみんなは、きれいにクラスが分かれていた。

毎年クラス替えがあるので、多くの人と同じクラスになれるといった反面、同じクラスになってもなかなか顔と名前が一致しないまま、「はい、お別れ」ってこともある。

「三矢さん」

名前を呼ばれ振り向く。

見たことがあるような、ないような、きれいな女の子が二人、双子のように立っていた。

もちろん、双子じゃないだろうけど。

「あの、ちょっと聞きたいんだけど」

「なんでしょう」

でもその顔つきは、人になにかを尋ねるようなものではなかった。私の脳内で、黄色い信号がピカピカと光りだした。

「三矢さん、双葉君がやっているサークルに入っただけでしょ」

うっ、わあ。う、嘘でしょ。

これ、双葉絡み？

つまり、テレビや漫画でよく見る、あれでしょ。

人気男子に近づくイマイチ女子のもとに、集団で女子がやってきて。

学校の裏とか体育館の裏とかお寺の裏とか、ともかくどこかの裏に連れていかれて、剃刀で脅されたり、蹴飛ばされたりするやつで

しょ。

思わずそばにあった、柱を手で掴む。

いやまさか、まさかこのきれいな人たちが、力づくで私を引きずっていくなんてことは、ないとは思いますよ。

思いますけどね、人はみかけによらないってことは、四条君からもわかることで。

「ここじゃなんだから」と、きれいな女の子A。

「い、いえ。ここで」と、柱を掴む手に力を入れる、イマイチ女子C。

きれいな子たちは顔を見合わせると、一歩、また一歩とイマイチ女子Cに近づいてきた。

な、な、な、ちょっと。

こ・な・い・で〜！

「私たちも、入りたいんだけど」

これ以上とないほど近づいてくると、女の子Bがそう言った。

「え？ あ、紙芝居のサークルに？」

ああ、なんだ入部、じゃなくて、入サークルの希望者か。

「あ、うん。それは嬉しいな。人数多い方が、これからなにかといだろうし」

色塗りとか、やることはいくらでもある。

そっか、なあんだ、紙芝居に興味があつたのか。やれやれ。

「でもね、だったら私じゃなくて、伍代君とか、岡村さんもいるし、そっちに行つた方が通りが早いと思うよ」

何しろ、私だつて入りたてのほやほやだから。

あ、だから私に、声をかけたのかな。

かけやすかったのかもしれないな。

「今度ね、水曜日だよ。明日の水曜日。場所はねー」

「ねえ、それって、大変？」

女の子Aの問いに、びっくりする。

「え？ 大変って、それどんな意味？」

「ん。だから、週に何度も集まつたりとか、作業があつたりとか」

「そりゃ、紙芝居を作ったり、それを病院や小学校でやるんだから、それなりにすることはあると思うけど」

なにを当たり前のこと聞くなあ、と首を傾げる。

「そういったこと、しなくちゃダメ？」

ダメって、あなた。

「だって、そういったことをしたくて、入るんでしょ」

そう言いながら、そういったことをしたいわけじゃないんだ、と察した。

ということは、やっぱり私が最初に感じた通りの、双葉目的なのかなあ。

「うーん。私個人としては、理由はどうであれ、クラブなりサークルに入るのは、ありだと思うけど」

何かをはじめるとき、そこに崇高な理由がないとダメなのだとしたら、それは窮屈な世界だ。

動機はともかく、やるうちに何かが見えてくることって、あると思うから。

そうは、思うんだけど……。

「サークルだから、入りたいって思う人は誰でも入れると思うよ。ただ、入るからには、なにもしないってわけにはいかないと思うんだよね。特に、このサークルに関しては」

頭の中に、伍代君の顔が浮かぶ。

私が入ると言ったときの、あの顔を。

伍代君は、紙芝居の上演をすることに、強い思いがあるようにだった。

私は、伍代君と握手をしたとき、それを強く感じた。

当然、私は、伍代君と同じ思いでも、熱さでもない。

けれど、私なりの誠実さを持ち、このサークルと関わりたいと思

ったんだ。

「入るなら、やっぱりそれなりの作業はあると思うけど。でも私も入ったばかりだし。もし詳しいことを聞きたいなら、伍代君に聞いた方がいいと思うよ」

言葉を慎重に選ぶ。

これは、私が判断していいことじゃないと思ったから。彼女たちをどうするかは、伍代君が決めたほうがいい。

「三矢さんは、なにをするの？」

「うん。私のすることは、物語を書くことだけど、それが終わったら絵に色を塗ったりとか、できることは全部しようと思うよ」

「あ、そういえば、文芸部だったっけ」

「うん」

それきり二人は黙ってしまった。

もう私に用はないよねと、柱はキープしつつも、じりじりと後ずさる。

「あ、あのさ。余計なお世話かもしれないけど。もしかして、その……国府田君と仲良くなりたいのなら、わざわざサークルに入らないで、直接誘えば？」

国府田君一人を誘うのがアレなら、伍代君とか四条君にも、声をかけてさ。

「あ、四条君、甘いもの好きだから、そういったことでつれるかもよ」

四条君は今度私に、おすすめの最中をくれると言った。それを、今から楽しみにしているんだけど。

「だったら、それ、三矢さんがしてよ」
女の子Bが言うと、「言い出した人がやってよね」と女の子Aが言った。

いや、別に私は、三人とお茶なんかなくて、いいっていうか。

「頼んだから」

そんな捨て台詞と、自分たちのクラスと名前を告げると、彼女たちはやけに威張って去っていった。

「あ、あれれ」

あれ？

なんで、こんなことに？

——余計なお世話かもしれないけど

ああっ！

なんてことを、言っちゃまったんだ！
自業自得とは、この様なり。

ああ、もう！ と、自分自身に腹が立った私は、柱に向いパンチをした。

家に着いたときには、頭の中は自己嫌悪で既に一杯だった。もう、溢れそうです。

「三匹のくま」の世界にどっぷりとつかり、物語を仕上げるつもりだったのに、そんな気にもなれない。

言い訳が全くできないほど、私が悪い。

つつい、余計なお世話なんかをする資格は私にはないのに、してしまった挙句の……ドツボ。

ぐったりして、さらにため息をつきながら家に入ると、「ミチカちゃんが来てるわよ」なんてことをお母さんが言ってきた。

平日に、ミチカが来るのは珍しい。

おけいこ事や、友だちと遊んだりで、昨今の小学生は芸能人なみに忙しかったからだ。

でも、キッチンを覗いてもリビングへ行っても、ミチカの姿はなかった。

あれれ、と思っていたと、お母さんは無言で人差し指を立て、二階を指した。

あ、私の部屋か。

了解の意味を込めて頷くと、お母さんからトレイに載せたジュースとお菓子のセットを、渡された。

「ミチカ、ただいま」

部屋を開けても、ミチカの姿はない。

おやおや、と部屋の中まで入ると、なんとミチカは私のベットに入って眠っていた。

「まるで、ゴールドロックスだ」

「三匹のくま」の女の子よろしく、ミチカは私のベットで眠っている。

顔を覗き込むと、明らかに涙のあとと思われる筋が、左右の目の下にできていた。

私はミチカが起きないように、自分の部屋着を取ると、そのまま洗面所へ向かった。

「あ、そよちゃん？」

もぞもぞとミチカが動く音がしたので、振り向く。

「うん、起きた？」

ミチカは、うんと言いながらベットを下りた。

そして、私の腕をくぐると、目の前にあるパソコンの画面を読みだした。

「ええと、あれ。『さんびきのくま』？」

腕の中にいるミチカに「新作だよ」と言うと、途端に瞳が輝いた。「今度のお話会でやるの？」

お話会は、最低月に一回はするようにして（そのくらいのペースでないと新作が用意できないので）、次回はまだ先だ。

「お話会でもやるかもしれないけど、これは紙芝居用に作っている物語だよ」

「紙芝居？」

そっか。

ミチカは知らないか。

「うん。この間お話会に来たお兄さんがいたでしょ。あの人たちが、

紙芝居と一緒に作ろうって言ってきてね。私は、物語を作る係なんだ」

そう説明するとミチカはふーんと言った後、「お兄さんは、何をするの？」ときた。

「お兄さんねえ。……うーん、多分。絵に色を塗る係だと思うよ」
とりあえず、そう答えておく。

「ミチカも塗りたいなあ」

ミチカ、ぬり絵得意だし、とアピールをしてくる。

「そういえばそうだね。でも、これ、高校でやることだから、ミチカにはお願いできないかも。そのかわりさ、紙芝居を持って、ミチカの学校に行くと思うよ」

伍代君が、ミチカの校名も出したことを思い出す。

「そちゃん、ミチカの学校に来るの？ あ、それって水曜の『図書室で遊ぼう』かも」

ミチカの説明によると、隔週の水曜日は『図書室で遊ぼう』というのがあり、お母さんたちの読み聞かせや、地域の人がペープサートや、歌の会などを開いてくれるそうだ。

「高校生の人も来たよ」

訊くと、他校の生徒が（ミチカの説明を聞くとボランティアサークルのようだが）、紙芝居の上演をしたらしい。

「ミチカ、それって、図書館にあるような物語？ それとも私が作るような物語？」

つい不安になり訊くと「図書館にある、昔話とかだと思う。でも、ミチカは知らない話だったけど」との答えがきた。

ミチカが知っている物語なんて知れているけれどと思いつつ、そのあらすじを聞くと既存のもののようにだった。

ほっとした。

伍代君の顔が浮かんだ。

——誰も知らない物語をやりたい。

約束云々はともかくとして、伍代君の気持ちが少しわかった気がした。

ミチカを相手に話すことで、物語はより上手い具合に、纏まっていった。

つくづく物語って、生き物だなあと思う。

「あのね、こわいことあったんだよ。そちゃん」

二人でおやつを食べだすと、ようやくミチカが話し出した。

「今日ね、集団下校で、五、六年生と一緒に帰ったんだけど」
「どうやらそこで、五年生と六年生が喧嘩を始めたらしい。」

「バカー！　とか、すごく大きな声で言って、先生やお母さんたちが止めても、やめないんだよ」

側にいたミチカはそのとばっちりを受けて、五年の男の子に突き飛ばされたそうだ。

見ると、ミチカの膝には絆創膏があった。
かわいそうに。

上級生にもなると、体格のいい子もいるだろう。

そんな子たちの喧嘩は、びよびよの一年生のミチカにとって、さぞ迫力あるものだったに違いない。

それはともかく、なにも一年生を押さなくてもいいだろうに。

「喧嘩なら、みんなで集まったときもあるけどねえ」

いとこたちが集まると、楽しいことは勿論多いが、喧嘩だって負けず劣らずある。

でも、こんな風に関係のない子をまきこむことは、ないように思えた。

「大変だったね」

私が言うと、ミチカはそのことを思い出したのか、目がうるみ始めた。

「まあ、ミーさん、飲みなせえ」

お酒を注ぐようにミチカのコップにジュースを注ぐと、ミチカはにこりと笑った。

カサリと紙の音だけが響く。

ごくんとつばを飲み込む音が、やけに大きく感じられた。

水曜の放課後。

紙芝居サークル。

伍代君に四条君に双葉といった順番で、私の原稿が回し読みされていた。

原稿は、「三匹のくま（仮）」だ。

ミチカが帰った後、もう少し練り直しプリントアウトしたものだった。

その間、私は三人の様子を意識しつつも、四条君が作った紙芝居の場面案を見ていた。

四条君は一枚の紙を分割して、簡単な絵とその絵に付く一言程度の場面説明を書いていた。

いくなれば、四コマ漫画の十二コマバージョンだ。

自分が書いたものが、紙芝居になるってことは勿論わかってはいった。

けれど、こうして四条君が場面を絵に起こしてくれたことで、それが具体的に見え現実味を帯びてきた。

そして、震えた。

これって、もしかして、すごいことじゃない？

そもそも、自分の物語に絵がついたのだって、初めてのことだ。それが全編を通し、「絵」になっちゃうんだから。

……こりゃ、大変なことだ。

「面白かった」

伍代君の満足そうな声で、顔を上げる。

「ほんと？」

「うん。女の子が『くま用心』として、くまの着ぐるみを着るところなんか、絵にしたら面白そうって思った」

四条はどう、と伍代君がふると「うん。絵にしやすいと思うよ。場面起こしも、今しちゃうね」と、スケッチブックを取り出し、いきなり作業を始めた。

「ってことで、これからの予定だけど」

双葉がガサガサと、鞆から何かを取り出そうとしている。

「夢が訊いてきた病院のスケジュールと、ぼくが訊いてきた学校のスケジュールと、あとうちの学校の定期試験を擦り合わせて、とりあえずの予定を組んでみた」

まだ、相手さんには伝えてないと言いながらも、既にパソコンで作成し打ち出された予定表が、机の上に置かれた。

「最初が病院な。次が幼稚園。その次は続けて小学校が二校」

上演日が土曜や日曜のそれと違い、一番最後の小学校は水曜になつていた。

ミチカの学校だ。

「最後だけ、学校の希望として水曜で、この日は試験の最後日で、午後は空いているからそこにしたけど」

でもなあ、と双葉が言う。

「この日、以知子は既に頼まれたナレーション撮りが入っていて、できないっていうんだ」

どうしよかねえと双葉の目が散々泳いだ挙句、ぴたりと私で止まった。

視線を逸らすべく、すっと体をずらす。

「そんな逃げなくても」ねえ、と双葉。

「で、できないでしょ。紙芝居なんて」

さつと抜くとか、ゆつくりと抜くとか、読むだけじゃ済まないってことは既に知っていたわけだし。

「国府田君が向いていると思う」

体を思いつき椅子の上で斜めにしながら、提案する。

だって、暗記が得意な双葉だ。

それこそ、そういった分野は得意だろう。

「うーん。まあ、ぼくでもいいけどさあ」

ねえ、夢と、双葉が伍代君の顔を見た。

「え。ええと、双葉が読むってことは……」

伍代君の頭の中では、何かがカチャカチャと動いたようだ。

「え、あ、だめだよ！　だってそうだったら、手話は誰が……」
四条君が「伍代がやればいいんじゃないの」と言う。

「え？　手話？　どういうこと？」

「うん。紙芝居のときにね、その語りを手話でもしようと思ってね。そうしたら、耳からだけじゃなく目からも楽しめるでしょ」

手話って。

「できるの？　二人とも」

双葉と伍代君を見ると、双葉が首を傾げながらも、頷いた。

「ぼくは、ビギナーもビギナーだけど、夢はビギナーに少し毛が生えているかな。実践を積んでいる分、ぼくよりも明らかに上手いんだけどね」

上手い。

「あ、ごめん。こんなこと聞いていいかあれなんだけど」

双葉が頷く。

それに励まされるように聞く。

「その……手話に、上手いとか下手とかあるの？」

「ああ。うん、あるよ。手話のスピードとか、滑らかさっていうのかな。あと言葉の選び方とか、物語ならそれを臨場感たっぷりに表現するとかさ。声を出しての朗読でも上手い下手があるだろ。同じ

だよ」

そうなんだ。

双葉の話を聞くと、なるほど納得できた。

そして、私たちがこれから向かう先には、手話を使う子もいるんだと知った。

「伍代君、だめなの？」

私が聞くと、伍代君は黙ってしまった。
黙りの伍代め。

「……だ、だめっていうか。人前が苦手っていうか」

「人前って、子どもたちだよ」

「子どもだって、人だろ」

そりゃそうだけど。

「私もさ、大人や私達と同じ年くらいの人に向いお話をしろって言われたら怯むけど。でもね、子どもって案外大らかだから。だから、手を抜いていいとかそんなんじゃないけど。……やってみたら」

伍代君はうっと詰まった挙句、「ほんと、三矢さんは、容赦ないとぼやく。

そのあと伍代君はゆうに三分は黙った後、「わかった。やる」と言った。

「話の最中に悪いんだけど、『三匹のくま』の場面ができたから、見てもらっていい？」

伍代君と私が、やるやらないの話をしている間にも四条君は自分の仕事を着実にやっていたようで、さっきまでは真っ白だった紙には、出来立てほやほやの物語が紙芝居仕様に展開されていた。

これで候補作の全てが、場面割となった。

「上演予定日から逆算してさ、それまでに何作くらいが仕上げられると思う？」と、双葉が四条君に聞いた。

「そうだねえ。場面の絵が確定されれば、下絵はどんどん描けるし。一話につき十二枚が目安だから、今日から始めて土日があれば、一作分の下絵はできるかな」

「となると、次は色塗りかあ……」

「ねえ、そういえば気になっていたんだけど、色って何で塗るの？」

「そりゃ、あるもので」

「ん？ あるもの」

「うん、お金ないからさ。普通にみんなが持っているものやろうと」
「そっか。うん、そりゃ、そうだよね」

ってことは？

「あのさ、三矢さんは絵具とか色鉛筆とか持ってる？ もしないなら、俺とかあるからそれ使ってもらってもよくて。つまり、道具はさ、各自が家からあるものを持ってきて、で、ここで作業をしよう
と思っているんだ」

「そうそう。幸い部屋もあるから、道具はそのまま置いておけるしね」

双葉がにやりと笑っているのがわかったので、そっちは見ずに「で、色塗りってどれくらいでできるかなあ」と四条君に聞いた。

四条君は頷くと、「紙芝居の絵について、みんなに見てもらいたいんだけど」と、一冊の本をカバンから取り出すと、付箋のついたページを開いた。

四条君の見せてくれた本には、同じ場面を表現した二つの絵が並んでいた。

右の絵は、部屋の中で椅子に座ったおばあさんがいて、その部屋の様子も隅々まで描かれていた。

左の絵は、お婆さんが椅子に座る姿が中心にあり、部屋の様子はその近くだけが描かれていた。

「右が絵本で、左が紙芝居だよ」

「……あ、そっか！ 違うんだ」

勿論絵本も、左の絵のような表現もあるけれど、比較的右側が多いと思う。

「見ている時間の違いかあ」

双葉の言葉に、頷く。

絵本は、子どもがいつでも好きな時に、好きなページを、好きなだけ眺めていることができる。

一ページの中に、落ち葉があったり、木の実が落ちていたり、その近くに虫がいたりなど、物語の本筋とは関係ない絵を発見する楽しみがある。

けれど紙芝居は、読み手と見る側の呼吸で物語が進んでいくので、一枚の絵を眺め、そこから情報を得る時間は、絵本のそれに比べる

と短いのだろう。

ぱっと見た時に、伝えたい情報がダイレクトに伝わる表現が、絵本より紙芝居に多く求められているように思えた。

「うん。だから、十二枚といっても、全力投球するような描き込み方や色の塗り方じゃなくっていいと思うんだ」

「……四条君、勉強したんだね」

「当日は何もできないからね」手話とか手話とか手話とかと、四条君が伍代君を見る。

伍代君が椅子の上で、もじもじとしだす。

「ああ、つまり色塗りは」

「うん。みんな毎日やれば一週間。でも土日はできないから、余裕をもって二週間もあれば大丈夫でしょ」

来週の月曜に、下絵完成。

そして色塗りに、二週間。

で、紙芝居……完成？

「それと並行して、三矢さんは場面の台詞のチョイスと、ト書きを決めてもらえるかな」

「台詞はともかく、ト書きはちよつと、自信ない」

うーん、と四条君は考えると、伍代君と双葉にじゃんけんをさせた。

勝ったのは双葉だった。

「双葉は、三矢さんのアシスタントね」

双葉は、手を握り、自分が出したグーの形にすると、「よろしくリーダー」と言った。

決定事項

- ・絵本製作第一弾は「北風と太陽と雲」

(以後、作業の進み具合により第二、第三へといく。その作品順は未定)

- ・下絵は月曜まで↓ 四条

- ・色塗りは月曜から二週間で↓ 伍代・四条・三矢・国府田・(岡村)

- ・台詞とト書き↓ 三矢・国府田

- ・各上演場への予定の通知↓ 伍代

- ・担当の先生への報告↓ 伍代

メモ帳にそれらのことを書き、みなと確認した。

何作か並行して作るといった案も出たが、まずは一作仕上げようということで落ち着いた。

一作に集中。

しかし、進行の状況によっては、適宜対応をしていこうといった確認もした。

「あ、このことを岡村さんには……」と三人を見ると、「俺が伝えとく」と伍代君が言った。

その確認が終わったあと、四人でいよいよ、「北風」の場面決定を始めた。

一枚一枚の絵と、私が書いた物語を比べた。

原稿には、四条君による場面番号(本でいうならページ)があり、わかりやすかった。

チェックする点は、場面の選択と、絵の表現やアングルが適切かについてだった。

場面選択については、みな賛成だったが、絵については伍代君が「もっとここを大きく」とか、「絵を単純にして」と積極的に意見を言っていたので、私も遠慮することなく「こっちを中心にしたほうが」とか「もっと上からのアングルがいい」など、ほんと容赦ない発言をしてしまった。

それを四条君は怒ることなく、受け止めているんだから、彼は人間ができている。

意外だったのは、一番何か言いそうな双葉が、何も言わなかったことだ。

「じゃあ、これ」

学校のコピー機の前で、四条君は描き変えた場面の下書きを、私にくれた。

さて、どうしよう。

絵を見て台詞を選んで。

台詞はいいのよ、選べるから。

問題は、もっと大きなこと。

台詞だけのことじゃない。

紙芝居のしくみを、もっとじっくりと調べたい。

「なにを考えてるの？」

双葉に聞かれたので「うん、ちょっと明日にでも、図書館で紙芝

居を見てみようかと思って」

何をどう選んだら紙芝居っぽくなるのか、参考にしたいと思った。

「三矢さんの家の側の図書館といったら」と、双葉がその館名を挙げた。

そして「アシスタントとしては、お供をしないわけにはいかないね」と。

三人と駅で別れ、電車に乗り込みながら、何かを忘れていたような気持ちになった。

なんだっけな、と思いつつ、席に座り四条君からのコピーを広げると、その紙に影が落ちた。

「三矢さん、伝えてくれた？」

冷ややかなその声を聞いた途端、思い出した。

いえ、出しました。

あわわわ。

「ええと。それは……」

忘れていたわけじゃない。

昨日だって家に帰るまでは、もうどっぷり自己嫌悪に浸るほど、考えていましたよ。

ただミチカの涙の跡を見た瞬間、全てを忘れてしまったというか。ああ、だから、忘れていたってことか。

「あ、ごめん。それは」

そもそも、そんな軽い提案をしたのは私だ。
そして、そのことをころっと忘れたのも。

「……裏に、行きますか」

観念した声を出すと、「三矢さんの言っている意味分かんないけど、とにかく次の駅で降りて」ときっぱり言われた。

連れて行かれたのは、駅の裏ではなく、駅の側にあるドーナツ屋さんだった。

「とりあえず、三矢さんの奢りね」

なにがとりあえずなのか不明だけど、次回がないことを祈りながら、大人しく二人分のドーナツと三人分の飲み物を頼んだ。

ドーナツが二人分なのは、私のお財布事情だ。

「で、なんで？」

なんで言ってくれないの？ とAさんに言われる。

「約束したよね」

約束っていうのは、双方合意のもとに行われるものだと思うんだけど。

「それって酷くない？」

酷いか酷くないかと聞かれたら、彼女たちにしたら私は酷いのだろうから、何も言えない。

「紹介してくれるって言ったよね、双葉君を」

まるで黙りの伍代が降臨したかのように、私は何も言えなかった。私が何を言ったところで、彼女たちは受け入れないだろうとわかっていたから。

彼女たちが欲しいのは、双葉との場を設けるという、私の言葉だけだから。

もしかしたら、双葉と知り合ってすぐなら、そんな軽いことも頼めたかもしれない。

でも、なんだろう。

そういったことを頼むのは、ちょっと違うんじゃないかなって思

ったのだ。

大袈裟かもしれないけど、自分の保身のために友だちを売るような気持ちになったのだ。

双葉は友だち。

全く、なんてことだろう。

まさか、自分が「二股双葉」に対して、そんな風に思うなんて。でも、それは理屈じゃないんだ。

そう思ってしまうんだから、しょうがない。

「あれ、三矢さん探していたよ」

ひらひらと手を振りながら、なんと双葉が現れた。

私もぎょっとしたが、目の前の二人もそれ以上にぎょっとしたようだ。

「あれ、確か葛原さんと保品さんだよな」

そうそう。そういうお名前だった、さすが暗記の神。

名前を呼ばれると、二人とも顔を赤くした。

こうしていると、本当にかわいい女の子たちなのだ。

「三矢さん、四条がさ、三矢さんに聞き忘れたことがあるなんて、寝ぼけたことを言いだして」その駅で待っているから、悪いけど今すぐ行ってくれる？ と双葉は言った。

そして、私を席から立たせると、「これもらっていい？」と私のドリンクを指した。

話の流れとして、頷くんだろうが。

……が。

私が頷いたとして、双葉はこの先、どうしようというのだろう。

「じゃあ、三矢さん。また明日ね。四条によろしく」

双葉は、立っている私にバイバイと手を振ってきた。

そして女の子たちに、「ってことで、ぼくが三矢さんの代わりに、お茶しててもいいかな」と告げたのだ。

二人は、ぼーっと双葉の顔を見た後、ぶんぶんと勢いよく首を下に揺らした。

まさか、これって。

双葉が、あっちいけあっちいけ、と手で私を追い払う仕草をしてきた。

思わず、何歩か後ずさってしまう。

でも、そんなわけにはいかないと、前に進もうとした私のおでこに、何かが飛んできて当たった。

「あゝ、ゴミ箱に入らなかったかあ」

机の上の紙ナプキンを丸めたものを、双葉が私に投げたのだ。

「やだあ！ 三矢さんに当たったみたいよ」

嬉しそうに、葛原さんだか保品さんが言う。

これは、帰ってことだ。

双葉は、本気だ。

私はおでこを押さえながら、くると踵を返すと、挨拶もせず足早に店を出た。

駅には当然、四条君はいなかった。

電車の席は空いていたけど、座らなかった。

開かない側の扉の前に立ち、徐々に暗くなる外を眺めていた。

ふいに映った扉のガラスには、悔しそうな顔して泣く誰かさんの顔があった。

朝、私の顔を見るなり、両親は口をあんどりと開けた。声も出ないようだった。

「そ、それは、今の流行りはやなのかい？」

先に立ち直ったと思われるお父さんからそう聞かれたので、しらっとした顔で「一部で」と答えた。

内心、そこまで驚かれるとは思っていなかったので、念のために自分の写真を撮り生島に送ると、「生で見せろ」とすぐに返ってきた。

さらに、「最近料理もどきに凝っているから、いいのができたらあげるね」とも。

「いいの」かあ、とあれこれ想像する。

未だかつて、生島が言う「いいの」が、私にとっての「いいの」だった例は、一度もなかった。

通学路でも、会う子会う子に、微妙な顔をされた。

そこまでかなあと思いつながら歩いていると、「三矢さん、おはよう」と伍代君の声がした。

くるりと振り向くと、伍代君だけでなく、そこには四条君と国府田君までいた。

「おはよう」

三人の顔を見て挨拶をする。

均等に見たい気持ちはあったけど、うしろめたい気持ちのせいか、国府田君を見る秒数は三秒ほど少なかったかもしれない。

私の顔を見た三人は、両親と同じようにびっくりした顔になった。

伍代君に至っては、顎が外れるんじゃないかって、こっちが心配するほどだ。

「十センチくらい切ったの？」と四条君に聞かれたので、「そこまではない、七センチかな」と私は、ほとんどない前髪を摘んだ。

昨夜、お風呂に入る前に、突発的に前髪を切った。

最初は、二センチくらいだったと思う。

でもそれじゃ、全然足りない気がして、どんどん切っているうちにこうなった。

昨日、国府田君をエサにして逃げてしまったことに、私は罪悪感を感じていた。

たとえそれが、国府田君の指示だったにせよ、そういった状況を招いたのは自分だからだ。

自分を戒めたかった。

もう、こんなことはしないように。

あんな思いを、人にまでさせてしまったことが、嫌だった。

「三矢さんのその前髪って、そこはかたくなく昭和の香りが漂っているよね」

路地裏で石蹴りしていそうな。

「へえ、国府田君。男の子でも、石蹴りしたんだ」

私の周りでは、石蹴りはもっぱら女の子しかしていなかった。

「以知子に付き合って」

もう膝が、がくがくなるほどやったよ、とうんざりした顔で国府田君が言う。

「ああ、岡村さんと幼なじみなの？」

それは知らなかったなあと言うと、「うん、あと、ここにいる夢も」と国府田君は伍代君をつついた。

「えっと、じゃ、四条君は？」

「ぼくは、伍代と入院仲間」

「え？ 入院？」

ぱっと伍代君を見ると、居心地が悪そうな顔をしていた。

「ぼくが骨折して入院したときに、伍代もいて」

ああ、なるほど。

「病院の小児科病棟で、会ったんだよ」

「四条君が、小児科……」

「三矢さん、四条だって人の子なんだから、そりゃ小児の時もあったでしょ」

「はは、ごめん」

「……でも、充分でかかったぞ、四条は」

ぼそりと伍代君が言う。

「うん、あの頃はまだ、でかいだけ、だったもんねえ」

四条君が、伍代君に視線を向けた。

「今だって、たいして変わんないだろ」

伍代君が渋面を作ると、反対に四条君は笑った。

私の前髪は、概ね不評で、それがかえってありがたかった。
罰なのだから、それでいいのだ。

休み時間に廊下を歩いていたら、元文芸部顧問、現サークル担当
の山中先生に声をかけられた。

「三矢、伍代のサークルに入ったんだってな」
「よろしい、よろしい、と笑みを浮かべている。」

「先生、なんか、嫌な感じ」

文芸部の部室なんて使ってさ、と一応、元文芸部としての文句を
言う。

「はは。まあ、しょうがないな。でも、あいつら一生懸命だろ」

そう言われると、頷くしかない。

双葉じゃないけど、彼らの行動を見ると、嫌でも私の「営業
努力」不足を感じたからだ。

「それに、高校で何かをすることは、三矢にとってもいいだからさ」
山中先生はそう言うのと、「大学入試の時の書類。いろいろと書く
ことがあったほうがいいからな」と、さもとっておきのことを教え
てくれるかのような、ひそひそ声で言った。

大学受験。

ぱっと頭に、暗記の神が浮かんだ。

……何かコツでもあるんだろうか。

今度、聞いてみようかなあ。

「何を誰に訊くって」

今まさに思い浮かべていた人物が、そこにいた。声に出していたか、私。

「国府田君に、暗記のコツを聞こうと思って」
勢いにのって聞いてみる。

「あ、それね。ぼくにもわからないんだよね」

双葉の答えは、肩すかしを食うようなものだった。

「親父も、すごく暗記が得意だったみたいだけど、それがあつた日」
国府田君が声をひそめた。

「二十五を過ぎたあたりから、全く何も頭に入らなくなったって」
国府田君の話に、びっくりする。

「親父曰く、やっぱり人間の脳には溜めておける情報の量ってものがあるから、だからおまえも若いうちにその能力で行けるとこまで行け、と」

なあんか無責任に聞こえるんだよなあ、と国府田君が肩をすくめた。

「暗記科目だけじゃ、東大に行けないし」

「東大！ 受験するの？」

「まさか。受験料の無駄」

きっぱりと、国府田君はそう言う。

そして、予定が入ったから、悪いけど図書館には先に行ってもらえるなか、と言ってきた。

うちの近所の図書館は、地下のある二階建て、子ども向けの書籍は二階にあった。

階段を上ると、馴染みの司書さんがいたので、挨拶をした。

「あれ？　今日は、誰もいないですね」

いつもなら、何人かの子は必ずいるここに、誰もいなかった。

「うん、学校行事があったから、今日はみんな来ないかもねえ」

疲れたり、はたまた遊ぶ時間がなくなりそのままおけいこ事や塾へと。

「あの、だったら」

私は紙芝居を作ることを伝え、図書館にある紙芝居を参考にした
いことと、その作業をここでもいいかを続けて聞いた。

二階の席は、子どもが優先だ。

だから絵本や童話を読むときは、わざわざ別の階に持って行き、
読んでいたが。

「うん、いいわよ。というか、前から言っただ方がいいだろうな、と
思っていたけど」

そう言うと司書さんは首を傾げた。

「三矢さんだって、図書館としては、まだ子どもの分類になるのよ」
高校生まで、この階を優先に使っていいんだもの。

「え！　そうでしたか」

司書さんからみたら、私もお子様と同類！

「三矢さん、今度来る時間を遅くしてみたらいいわ。中高生がここ
で宿題をしているから」

たまに数学とか聞かれて、困る時あるのよねえ、と司書さんは苦
笑いをした。

紙芝居を一通り見た後、四条君が描いた場面を眺め、自分の原稿を置いた。

そして気合を入れて、場面に合い、話が繋がるような言葉のチョイスを始めた。

「ひとりごと、言ってるよ」

「おわっ？」

顔を上げると双葉がいた。

「できたの？」

「うーん。……うん、一応」

……できた、が。

「ん、じゃ、ぼく聞いているから、やってみてよ」

「ほ、ほんと？」

今の声は大きかったと回りを見たが、本当に今日は誰もいなかった。

「大声じゃなけりゃ、大丈夫でしょ」

双葉もここが図書館だってことをわかっての、言葉だったようだ。

「うん、じゃあ、よろしく」

うわあ、よかったあ。

書いたものの、これで通じるかどうか、不安だったんだよね。

ふふふと笑いながら、読み始めようとすると、隣の席からくくと笑い声が聞こえてきた。

「あ、ごめん。どーぞ」

読んで読んで、と双葉が催促をする。

「……んじゃ、読みます」

ということで、私は場面を指でさしながら、紙芝居用にした物語を読み始めた。

双葉は、話を聞きながら「誰の台詞かわかんない」とか、「うーん。説明長いし」といったダメ出しをバンバンしてきた。

その度に止まって、赤を入れて、また少し戻っては読みだす、といった作業をしていたら、あっという間に時間が過ぎた。

そして、できてしまった。

紙芝居用の台本が。

最初は、台詞やナレーションだけを作るつもりだったけど、双葉が「そこゆっくりでしょ」とか「声は小さくじゃない」など言うもんだから、終わって見たら全部でできていたってこと。

双葉、使える男だ。

ううん、双葉だけじゃない。

「あのさ、キミたちって仕事早いね」

軽く放心状態になりつつそう言くと、そうかなあと言われた。

「いや、絶対に早い。文芸部でこれやったら、もう平気で三日はかかる。あれこれ意見が出て」

「ああ、それはさ、話し合う人がみんな、何かを創るひとだからでしょ」

「何かを創るひと？」

「うん。三矢さんとか、四条とか」

「あ、ああ。ふーん。そうなのかなあ」

「そうだよ。……羨ましいと思うよ」

そう言うとき双葉は、三矢さんなんか特にね、と言った。

「このワタクシの、どこがっ！」

これといって優れたところのない、ワタクシの。

「まあ、顔も容姿も恐らく成績も、ぼくは三矢さんに勝っていると思うけど」

「……喧嘩売ってんの？」

全然羨ましいとは思えない言葉に、むしろ全然好ましくない表現に、腹が立ってくる。

双葉は、笑いながら「まさか」と言ったが、今まで聞いた「まさか」の中で、一番信憑性のない「まさか」だった。

「もし、今ここで、電気も消えてガスも消えて、ぼくたち二人だけになったとしても、そんなときでも三矢さんは産みだすことができるでしょ、物語を」

あつ。

確かに、そうだ。

私の物語作りは、そこから始まったのだから。

「ぼくは、そんなことできない。読んだ話をそのまま伝えることはできても、それ以上のことはできないから」

「……それって、国府田君にとって大事なことなの？」

私が聞くと、双葉は「昔はね」と言った後、「今は、どうなんだ

ろくなあ」と曖昧な答えをした。

「世の中って、不公平だよ」
そう思わない、と聞かれる。

「世の中は、そりゃ、不公平だよ」
うん。

「だよ。ほんと、打ちのめされるよ」

世の中は不公平だ。それは、そうだ。

でも、そのことに、この双葉が打ちのめされるって、どういふこと？

「どちらかというとき、国府田君は、他の人を打ちのめすほうなんじゃないの？」

「うん。そうなるんだろうね」

双葉はそう言うのと、拳を握った。

「でもさ、三矢さん。殴った奴と、殴られた奴。そりゃ、殴られた奴が痛いのはもちろんだけど、殴った奴だって痛いとは、思わない？」

まじまじと双葉の拳を眺める。

「……素手、なら」

「素手っ！」

素手、か。素手ときたか！ 素手発言が受けたようで、双葉は笑いだした。

「ああ。ぼくたちが子どもの頃に、三矢さんがお話のお姉さんだったら、よかったのになあ」

「ぼくたちって、伍代君や岡村さんのこと?」

三人は幼なじみだ。

「うん。そう」

ふーん。

「……国府田君は無理だけど、国府田君に子どもができたなら、お話ししに行ってもいいよ」

ん?

ちょっと、今の発言はNGか?

「な、なあんてねっ」

あはははは、と笑って誤魔化す。

「え、まじで。予約しとうかな」

国府田君も、その気になったフリをしてきた。ノリがいい。

「ところで、その前髪さあ」
ぎくりとする。

「昨日のこと?」

双葉の語調から、疑問系で聞きつつも、そうじゃないってわかっている。

「国府田君。……ごめん」

言い訳なんて、できない。

だから、国府田君に言える言葉は、それしかない。

「三矢さんって、ほんと損な人だね。女の子なんだからさ、泣いちゃうとか、甘えちゃうとかして、うやむやにしちゃえばいいのに」「えっ。そ、そんなこと」

ちよいと国府田君、巷で女子はそんなことをしているのかい、と小声で聞くと、よくあるよ、と返ってきた。

「こ、国府田君」

両手を目に当てる。

「ご、ごめんなさい」

ついでに、えぐえぐとか言ってみる。

「お、いいねえ」

双葉の声がする。

「よかないだろっ」

手を離し、じっと双葉を見る。

双葉もじっと、こっちを見ていた。

「……ほんと、ごめんしか言えない。あんな、国府田君を、身代わりにするような」

本当は「売るような」と言いたいところだが、それはあんまりな表現だ。

「そうか。三矢さんは、すごく気にしてくれたんだ」

「そりゃ」

そりゃ、そうだ。

「ふーん。でもさ、例えばさ。ぼくが喜ぶとか、思わなかったの？」
「え、喜ぶ?。」

「あんなかわいい子たちを、紹介してもらって」
「あ……」

ほんとだ。

「そう言われると、そうだよね」

「しかも、二股双葉でしょ。女の子大好きな」

「ああ。……うん」

でも。

「私、二股双葉のうわさを聞いたとき、そんな人、嫌だなんて思った。でも、自分には関係ない人だと思ったし、私の中でも現実にいる人って感じじゃなかった」

まるで芸能ゴシップのように、私はそれらの話を聞いていたから。

「でもさ、今は違うじゃない。つまり、なんて言うか」

……「友だちだから」、なんて言うのと引くよね。
うん。

「『血の雨』の真相も知っちゃったし、サークルでの国府田君と、二股双葉が結びつかなくなっちゃったっていうのもあって。あの子たちが、自分たちで国府田君を誘うなら問題ないんだけど、そこに私が入ってっていうのが、なんかなあ……と思ったんだよね」

でも、誘えって女の子たちをけしかけたのは、私なのだ。

そして、彼女たちはそれを私に頼んだ。

ええと、つまり。

頭がこんがらがる。

ん。

―― ああ、そっかあ。

そっかあ。

「あのさ、すつごく酷いことを言ってもいい？」

「三矢さん、アナタいつも散々言いたいこと、言っているじゃない。なにを今更」

双葉が笑う。

うむむ。

私って、そんなに言いたい放題かな。

……まあ、この際それは置いておいて。

「私ね、彼女たちに国府田君を誘えばって言ったのは、誘ったところで、断わられると思ったんだよね」

酷い。

断わられるだろうと思いつつ、エールを送ったのだ。

双葉と知り合ってまだほんの少しだけど、噂に聞いていた二股双葉とは違うって、思い始めていたから。

「それに、彼女たちのサークルへの興味が、国府田君によるものなのかなあと思った時から、このことは全部、国府田君に投げようとしたんだ」

「それで、正解だと思うけど」

「……そう、かなあ」

「あのさ、三矢さん。なんでも自分で解決できると思う方が、おかしいんじゃない？　そもそも、あの子たちは、ぼくの件で来たんでしょ。なのに、なんで、三矢さんが前髪をパツツンするほど、気に

病むのか」

国府田君が、私の前髪をぱらりといじる。

「三矢さんはさあ、その前髪を見て、ぼくがなにも感じないとも思ったわけ？」

「はあ？ え、国府田君が？」

なんで？

しかも、何を？

だってこれは、自分への戒めのためにしたことだ。

「三矢さんの前髪を見るたびにさあ、ぼくは自分の不甲斐なさを感じるじゃないさ」

そう言うのと双葉は、ごそごとポケットから小さな紙袋を出し、

「以前、以知子に買った店でいいのがあったなあと思い出して」と、私の前髪をそこから出した小さなピン二つでとめた。

「え」

とめられた前髪を押さえる。

「そんな長さならさ、もういつそないほうがいいでしょ」

「で、でもっ。これじゃ、意味ないっていうか」

「意味？ もうそんなの、どうでもいいじゃない。終わったことなんだから」

国府田君はそう言うのと、この件はおしまいとばかりに、「『北風』をさ、もう一回通して最後まで読んでみてよ」と言ってきた。

でも。

「あのさ、このピンのお代は……」

いくらなんでも、ただで貰う訳にはいかない。

すると国府田君は怖い顔をして、「無料!」って言うと、私にでこピンをしてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0949y/>

ハネグンのほらふき娘

2011年11月21日13時40分発行